妄想してみた

内服薬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妄想してみた

【Ｎコード】
Ｎ０６７１Ｑ

【作者名】
内服薬

【あらすじ】
この小説は連載小説として投稿していますが、その実は短編ｓｓをいくつも連ねる予定です。ゆえに、あらすじはそれぞれの話しごとに違います。ちょっとした恋の話を“食べたい”人だけどうぞ。ただし味の保障はしかねます。

すずかｓｓ　ある日の事（前書き）

まず最初に、作者はこれが初投稿ですので作品の良し悪しはあまり期待しないでもらえると助かります。
叩かれることを前提に投稿を決心いたしましたが、それでも出来れば誹謗中傷以外の感想をお待ちしています。
二月になるまでリアルが忙しいので、それまでは不定期更新とさせていただきます。

記念すべき最初の作品はすずか。
心行くまで妄想をお楽しみ頂けることを願っております。

すずかｓｓ　ある日の事

「あのー……一体いつまでこうしていればいいので？」

「私が満足するまで、かな」

「ですよねー」

体勢、すずかが俺の肩に頭をのっけて寄りかかっている。
場所、一人暮らしでもない三人家族の我が家の俺の部屋。
時刻、午後八時。
経緯、遊びに来たすずかが夕食を此処で食べて、なし崩し的にそのまま俺の部屋へ。
つまり、俺、大ピンチである。

ちょうど買い物の帰り道にすずかに会って、借りていたノートを返そうと思ったから家まで寄ってもらって、そして玄関で待ってもらっていたと思っていたら母さんがいつの間にかすずかを家の中に入れていて、しかもそのまま強引に夕食まで御馳走してしまい、気が付いたら母さんの陰謀によってすずかが俺の部屋に。
何だこの状況。
いやまあ、流れとしては良くやるギャルゲーやエロゲーにも似たような流れは沢山あるから分からないでもない。
だがしかし、問題はそのような流れがあったとしても俺が一人暮らしでもない上に、一階には母さんがいるという事である。
つまり、お付き合いしている彼女を自分の部屋に入れているというのに手を出せない状況なのである。
こんなことなら自分の部屋は鍵を付けて防音にしておくんだった。

そんな思考のさなか、ふと脳みそに情報として割りこんでくるのは隣で肩を寄せているすずかから感じられる甘い匂い。
ついでにわずかながらに二の腕に当たっている柔らかい感触。
自分の部屋がこんなにも油断のならない場所だったとは知らなかった。

「その……胸が当たっているんですが」

「当たってるんじゃなくて当ててるんだよ？」

思い切って告白してみたら、淫猥な笑みで返される。
分かってはいたが、もしかしたらという期待を持った俺がやはりバカだったか。
しかも、告げたが為にすずかは俺に寄りかかる圧力をさらに増して、そのせいで胸が当たる面積が増える。
何だか小悪魔に見えてきたのは気のせいではないはずだ。
俺に手を出させようとしているのが目に見えている。
だがしかし、いつものようにすずかの挑発にそのまま乗ってしまうような俺ではない。
付き合いだした頃のうぶなままではないのだ。
人は成長するという事を目に物見せてやる。

「……」

と、思ったが、やはり俺には何も言い返せなかった。
ヘタれなのでそんな事は出来ません。

そういや、思い返せば俺のような一般人がすずかのようなお嬢様と知り合う事になったのは偶然に偶然が重なった結果だった。
中学生のころにすずかが誘拐されて、たまたま下校途中に傍に居

た俺がそれを止めようとしたら後頭部を殴られて一緒に誘拐されて。
そしてその時にすずかが「夜の一族」と呼ばれる吸血鬼のようなものであることを知ったんだっけか。
まあ、あの時はすずかが吸血鬼だっていう事よりもすずかを助けに来た高町家の人たちの超人ぶりに驚いていたからそちらの方が印象に残っているというのは今では笑い草でしかない。

「どうしたの？」

「いや、一緒に誘拐された時のことを思い出して」

俺がくつくつと笑いだしたのを不審に思ったのか、すずかが俺の肩の乗せていた頭を離して聞いてくる。
一緒に誘拐されていた時のことだと告げれば、すずかもそれを懐かしむようにしてまた先ほどと同じ体勢に戻る。
さらさらと流れる髪も、触れている所から伝わる彼女の体温も、別に普通の人間の女の子と変わらない。

「懐かしい？」

「まあ、な。仲良くなった切っ掛けだから」

「ふふ。あの時はびっくりしちゃった。私が吸血鬼だって言われたのに、『吸血鬼？　むしろ萌え要素だろ』って言いきったんだもん」

まあ、あの時は柄にも無く初めて誘拐されたという事でてんぱっていたから口を突いて出たというか。
むしろ、エロゲーマーとしては吸血鬼なんて言う要素は別に気にするようなことではない訳で。
それに予想外だったのは助けに来た高町家の二人が目で追えない

動きをしていたり、普通に銃弾を避けていたことで。
それから月村家のメイドさんがロボットだったりする事。
あの日から俺の生活と常識は一変してしまったようにも感じる。
「俺としては、すずかが実はおしとやかお嬢様じゃなくて、淫乱吸血鬼だったって言う事の方が驚きだったが」
まあ、そういうパターンも無きにしも非ずであったから予想は付いたことだったが。
しかし、誰がリアルでエロゲーを体験する事になると思うであろうか。
むしろ俺は今この状況に居ることすらも実は夢落ちなのではないかと1%ほど疑っていたりする。
「……淫乱にしたくせに」
どの口がほざくか。
どう考えても最初にそういう雰囲気に持ち込んだのはすずかだったし、記憶が正しければ彼女にリードされていたような気もする。
男としてそれで良いのかはともかく。
しかも同い年のはずなのに俺を年下扱いするし。
「元からだろ」
「ふーん、そういう事言うんだー。……ねえ、やっぱり私たち付き合ってるんだから学校でもそれを見せつけるべきだと思わない？」
「……ナマ言ってすいません」
「ん。よろしい」

と言ってすずかは立ち上がり、部屋を物色し始める。
一応彼女はその容姿と性格から同性にも異性にも好まれ、告白されてきた回数も数知れないから、自分に魅力がないなどとは思っていない。
だから、何のとりえもないような俺みたいな人間がすずかと仲良くしていると、殺気を学校中から浴びせられることになる訳で。
すずかもそのことを分かっているから、学校ではあまりべたべたしないようにしている。
その代わりに人目のつかないところではこうして１２０％の実力を発揮する訳だが。

「それで？」

「何が？」

「何処に隠してあるの？　エッチな本とゲーム」

本とかゲーム、ではなく本とゲーム、という聞き方をするからには隠していることを前提に聞いているのだろう。
しかも、本とゲームの両方を。
机の下にある引き出しを開いて中を物色しながら聞いていて、その声は確実に俺の耳に届いているのに視線は彼女の尻を追いかけているあたり、俺もダメだなぁと思いつつ。

「ははは。そんなもの持ってるわけないじゃないですか」

すずかならばベタな所は探さないと思っていたが、どうやら予想は当たったようで。
そういうものは全てベッドの下の服が閉まってあるケースの一番

奥に隠してある。
つまり、いくら本棚や机を探した所で見つかるはずもない。
ウチの母さんはノックもせずに入ってきては掃除するから、隠し場所は念を入れているのだよ明智君。

「本当に？」

ずいっとにじり寄ってきて、すずかはその綺麗な瞳で俺の事を覗き込む。
ベッドに腰かけていた俺に対し、迫るように近づいてきて、その距離はお互いの息がかかりそうなほど。
未だにすずかの綺麗な瞳を近くで見ることには恥じらいを隠せない。
故に、俺の顔は真っ赤に染まってしまっているだろう。
そしてすずかはそれを楽しんでいるのだからやるせない。

「本当だって」

「……嘘だね。目を逸らしたもん」

内心でギクッ、という音がなったかのように思えた。
俺の言葉を最初から信じずに嘘だと見抜いてしまったすずかは、夜の一族故に男子よりも強い力で持って俺の事を押し倒して、逃げ場を作らせないように覆いかぶさる。
この細うでの何処にそんな力があるのかと思えるほどに、俺の身体は自由が効かない。
髪がハラリと重力に従ってすずかの肩から毛先をこちらに向けて落ちてきて、その長い髪の動きに見とれたが故、すずかと再び視線を合わせることになる。
自然、頬が紅潮して。

「……普通、逆じゃないのか？」

そんな事しか言えない。

何時まで経っても慣れないこの恥ずかしさを紛らわすかのように。

「じゃあ、私の事も押し倒してみれば？」

そう言ってすずかは俺の肩を掴んでいた手を離して、ベッドに置く。

スプリングが軋む音がして、唾を呑みこんだ音は幸いにもそれにかき消された。

しかしこれは、挑発、というよりもいつものように俺がどうするかを見定めている目だ。

挑発している時なら小馬鹿にしたように楽しそうに笑うが、今のすずかは真剣そのものというか何と言うか。

とにかく、据え膳を食う気概があるのかを彼女に問われているのだろう。

「……この野郎」

一瞬、自分の予想の中のすずかが嘲笑ったかのような気がして、気が付けばそんな言葉が口を突いて出て、すずかを押し倒していた。

鼻息が荒くなっているであろうことは間違いない。

今この場に母さんが現れたら、間違いなくすずかを襲おうとしているようにしか見えないだろう。

クスリ、とすずかは微笑む。

その行動だけで俺の視線は彼女のぷっくりとした唇に釘づけになってしまって。

気が付けば、吸い込まれるようにしてそこへ口づけを落とそうと

して、すずかもそれに答えるかのように目を閉じていた。

「……」

「……」

――ガチャ

「そろそろ夜遅いからあんたもいい加減に……おっとこれは失礼♪」

「……」

「……（くすっ）」

距離がゼロになろうとした直前に母さんが入ってきて、嵐のように出て行ったあとはいつの間にか目を開いていたすずかが笑いを抑えるようにしていた。

それだけで分かってしまう。

「……母さんが昇ってくるの分かってたろ」

「さあ？」

白々しい。

むしろこちらが赤面するほどの笑みを返されて、俺は再び何も言えなくなる。

多分、階段を昇ってくる音がすずかの耳には聞こえていたのだろう。

夜の一族は人間よりも身体的に優れているのは知っているから、別段そんな事が出来たとしても不思議ではない。

いや、むしろキスしようとする瞬間を見せつけようとしたのか。
それが分かると同時に、腹の中で小さく煮えくりかえる怒りを覚え、自分の下で笑っていたすずかの唇を奪う。

「！？」

急にしたから驚いたのか、目を見開いているすずか。
めったに見ることのできない彼女の驚きの表情を見る事が出来て満足して、俺は唇を離すとすずかに告げる。

「さて、夜も遅いことだしそろそろ帰らないとな。送るよ」

多分、今の俺はしてやったりという表情を浮かべているに違いない。
部屋に鏡は置いていないから自分の表情を見ることはできないが、久しぶりにすずかに反撃する事が出来て十分に満足した。
いつもすずかの良いようにやられてしまっているから、こんなに気分がいいのは珍しい。

「……ねえ」

「ん？」

すずかに声をかけられて財布と携帯をポケットにしまっていた体勢から首だけを返して振り向くと、彼女はベッドに腰掛けたまま指で唇を触って嬉しそうにしている。
無駄に可愛い。
そう、無駄に。

「……大好き」

「ぐっ……！」

天使のような笑顔でそう告げられて、俺の顔は一瞬にしてリンゴと化す。

何かを言おうとしても口がうまく回らない。

熱暴走を起こしたパソコンのように処理が遅れる。

「卑怯だろ！　それは！！」

「何が？」

クスクスと楽しそうに笑うすずか。

やっぱり、俺が彼女から一本とれる日は遠いのかもしれない。

それでも良いような気もするのはその笑顔ゆえか。

そんな事を思ったある日の事。

すずかｓｓ　ある日の事（後書き）

反省はしてない。後悔はしている。
……と、書いて見ます。

何でこんな恥ずかしい作品を投稿しようと思ったのかは未だに自分でも良く分かりません。
この湧き上がるような衝動を抑えきれなかったとしか。

作品に対する感想は随時お待ちしております。
出来れば返信もするつもりです。
誰それをヒロインにして欲しい、主人公に名前を付けて欲しい、こういうのを書いて欲しいなどありましたら、感想までご一報ください。
作者が暇な時に書くかもしれません。

ではでは次があることを願って。
次回の作品もお楽しみに。

フェイトｓｓ　彼女の事情（前書き）

本日は投稿する予定ではなかったのですが、ふと思いついてしまったので衝動的に妄想してしまいました。
成分としてはシリアスが半分ほど入っているかもしれません。
まあ、人によってはシリアスにも感じないかもしれませんが。

フェイトｓｓ　彼女の事情

「何か御用でしょうか？　テスタロッサ執務官」

そうやって聞くと、フェイトは悲しそうに表情を俯かせる。

そんな表情を好き好んで見たい訳ではないが、しかしどうにも腸が煮えくりかえるようなこの怒りは、そうでもしなければ収まりそうにない。

いや、そんな事をしても収まらないというのは分かっているが、それでもいら立ちをフェイトにぶつけるようにしなければやっていられなかった。

「あ、あの……」

「別段重要な用でもないのでしたらこれで失礼させていただきます」

そう告げて、彼女の悲しい表情を見たくないが為にその場から立ち去る。

その表情を作り出しているのは自分だというのに、何とも傲慢な事だ。

だけど、あのままあの場所にいてフェイトと話を続けていたら本局の人通りの多い場所だというのに彼女にキレてしまうかもしれない。

何処へ向かうでもなく、気が付けば無限書庫の前に来ていて、此処に居ればフェイトにも見つからないような気がしてそこへと逃げ込む。

思い返せば、フェイトと出会う事になったのもこの場所がきっかけだった。

司書の一人として無限書庫で働いていて、ユーノに連れられて合コンに参加してみればそこに彼女がいて、執務官として資料を探している時に手伝ったりして、気が付けば付き合っていた。
もう、付き合いだしてから三年にはなるだろうか。
最初はフェイトと付き合う事を認めて貰うのに苦労したものだ。
彼女の兄のクロノ提督が最大の壁であっただろう。

ちょうどフェイトが抱えている大きな事件も終わったから、そろそろ結婚の話題を彼女に振ってみて、そうしたら何かに怯えるようにしてその話題を先延ばしにされたのが一か月前。
時期を見計らってもう一度その話題をしたら、今度は何も答えてくれなくてフェイトがその場から逃げだしたのが一週間前。
以来、今日まで俺が一方的にイラついている。

彼女から話しかけられたのはこの一週間ではさっきが初めて。
だけど、長く付き合っていたから分かる。
さっきのは俺を避けていた理由を離してくれるような目ではなかった。

「くそっ！」

無限書庫の中で浮遊していた本が目障りで、それに八つ当たりをするように視界の外へ投げ飛ばす。
まだ結婚の話題が早かったとは思わない。
何せ、今までしてこなかったのが信じられないくらいだ。
後二年もしたら、二人とも二十代後半になってしまう。
適齢期が遅くなってきている現在では普通の事なのかもしれないが、それでも今までずっと付き合っていたことを考えれば早くはない。
クロノ提督にも、リンディ統括官にも早くしろと迫られていたの

だし。

もう、終わりなのかもしれない。

今までのはただの下らない幻想にすぎず、やっと夢から醒める時が来たのだろうか。

俺のような人間が、彼女に釣り合うはずもなくて。

それでも諦めきれないのは、誓ったから。

彼女を一生守り続けると。

だけど、フェイトがそれを望まないのだというのなら、俺は舞台から退場して役者から裏方になるのがいいのかもしれない。

「何だか荒れてるね」

「……ユーノか」

先ほど俺が投げた本を手に持って近づいてきたのはユーノ。

もしかしたら仕事中に本が彼に当たったのかもしれない。

そうだとしたら、八つ当たりとはいえ迷惑をかけて済まない事をした。

「僕でよければ相談に乗るよ？」

その目は、俺の事を本当に心配してくれているように見える。

ユーノとはかれこれ十数年の付き合いになる。

彼の伝手でここに働く事になり、フェイトと出会う事も出来た。

感謝してもしきれない。

そうやっていつも俺の助けになってくれるユーノだから、いつものように俺は彼に事情を説明する。

途中で口を挟まずにこちらが全部説明し終えて、愚痴もこぼし終

えるまで黙って聞いてくれていて、そして最後に深く頷いた。

「それで、何で君はイラついてるんだい？」

言われて、改めて考えてみる。

フェイトが俺の事を避けていたから？

いや、違う。

ならば何故か。

決まっている。

「……フェイトが一人で悩んでるからだ。俺に何の相談もしてくれないで」

それに、はっきりと言ってくれない事も。

もしも俺との結婚が嫌なら、俺の事が嫌いだとはっきり言ってくれれば良い。

そうしてくれれば俺も諦めがつくというもの。

なのにずるずると今日まで引きずるようにしてしまって、俺達の関係がはっきりとならないことにもイラついているんだ。

「なら彼女に何を悩んでいるのか聞けばいいじゃないか」

「無理やり、か？　俺はフェイトに無理やり聞きだすなんてことはしたくない」

「不器用だなぁ」

分かっている。

何か分からなくていら立っているのに、それを無理に聞きだしたくないなんて、矛盾も良い所だ。

フェイトが自分から話してくれるのを待っているだけで。
時には強引な事も必要なのかもしれない。
強引に引き出してしまう事も優しさだと、ユーノならば言うだろう。
それでもそれが出来ないのが俺という人間。
「ちょっと気分転換にでも出かけるかい？　僕も今仕事が片付いた所だし」
「良いな。出来れば飲み明かしてひたすら愚痴に付き合ってくれ」
そうして、俺とユーノは無限書庫からミッドの街に繰り出す。
男二人、寂しい組み合わせだが時にはこういうのも必要だ。
愚痴を聞いてくれる友達というのはそうそう居ないのだから。

「それじゃ」
「私たちはこれで」
気が付けば俺とフェイトの二人。
ユーノと呑みに出かけたのに、いつの間にか高町とフェイトの組み合わせと合流していて、そこから一軒回った所でユーノと高町の二人は俺とフェイトを残して此処を立ち去ってしまった。
「……」

「……」

気まずい空気が流れる。

酒で酔っていた頭はフェイトに会った瞬間に一気に覚醒して、完全に酔いがさめてしまったように感じる。

実際にはアルコールがまだ体内に残っているのだろうが。

真夜中を過ぎても爛々と光っている灯りを眺めている内に、決心が付く。

どうせダメになる関係なら、今日の内にすっきりと清算させておこうと。

「フェイト」

「……何？」

「俺は、お前が好きだ。許されるなら一生傍で守り続けたい。だから、答えてくれ。今ここで」

はっきりとフェイトの目を見てそう告げる。

若干頬が赤くなっているのは恥ずかしさ半分、酔いが半分だろう。

こういう大事な時にそれほどまでに酔っていなくて助かった。

口調が回らなかったらこんな事も真面目に言えなかっただろうし。

「っ……」

「俺が嫌いなら嫌いって言ってくれ。そうすればフェイトの前には姿を現さない」

「嫌いじゃない！　私も好き！　でも……」

公園には人の気配はすぐ近くに感じられない。
だから、大声を出した所で誰かに気付かれるという事もないだろう。
嫌いとも言ってくれない、でも返事もしてくれないフェイトを待っている内に、履きだしたはずの苛立ちが戻って来たように感じる。
顔を伏せて俺と視線を会わせないようにしたフェイトを待っている内に、強引な事も時には必要だと先ほどユーノに言われたことを思い出す。

そして、俺はフェイトとの距離を詰めて、彼女の肩を両手で掴んで木に押し付ける。
俺と木で彼女を挟んでそこから逃げられないようにして。
しかし、執務官として活躍している彼女ならばたかが司書の一人や二人、簡単に振り払って逃げ出す事も出来るだろう。
そうされたら、拒絶されたのだと諦める事が出来た。
なのに、フェイトは俺から逃げ出そうとしないで顔を伏せたままで居る。

「……ぇよ。何か言えよ！！」

「……」

初めてフェイトに本気で怒鳴った。
ビクリと彼女が肩を震えさせて、本気で俺の事を怖がった。
だからこそ、分かる。
分かってしまった。
もう、何を言った所でフェイトは拒む理由を俺には教えてくれないと。

「……さよな――」

「――もう、見てられないよ二人とも」

さよなら、と言おうとした所で突如として現れたエースオブエースにそれを止められた。

草むらの陰から姿を現した高町、その隣にはユーノもいる。

二人が揃っている所を見て、そういえばこいつらは結婚してるからユーノはスクライアじゃなくて、高町か、と関係の無いことを思う。

高町が現れたことでフェイトは、俺に怒鳴られて声を押し殺して泣いていた涙を、高町に受け止めて貰っていた。

その涙を拭うのが俺でないあたり、やはり別れを告げるのが正しかったか。

「高町、ユーノ、フェイトの事頼む」

「ダメだよ。フェイトちゃんは君じゃなくちゃ」

「そうだよ、フェイトは君の事好きだって言ってただろ？」

ポン、とユーノが俺の肩に手を置きながらそう告げる。

「フェイトちゃん、私から話すよ？」

高町がフェイトに何かの確認を取っていた。

高町の胸で泣いているフェイトはそれに小さく頷いて、俺と高町の視線が合う事になる。

その前に帰ろうとしたが、ユーノにバインドをかけられてこの場から動けない。

大人しく聞け、という事か。

「プロジェクトFは知ってるよね？」

当然だ。

告白した時にそのことを言われて、それでも良ければ付き合うと言われたのだから。

「フェイトちゃんはね……子供が作れないんじゃないかって心配してるの」

ガツン、と頭に鈍器を喰らったかのような痛みが走った。

酸素が欠乏したように、呼吸が苦しくなる。

真夜中だというのに景色が真っ白になったかのように錯覚する。

いっぺんにいくつもの衝撃が俺を駆け抜けていた。

「だから、もしもその事が分かった時に君に捨てられるんじゃないかって」

ユーノのバインドが解けた。

なのに、俺は既にここから逃げ出すという選択肢が生まれなかった。

フェイトが何に悩んでいるのかを考えずに、それを言いだしてくるまで待とうとしていたから、考えることなど放棄していた。

考えればすぐにでもその答に行きあたったはずなのに。

プロジェクトF、その話を聞いた時にフェイトと高町が知り合うようになった切っ掛けの事件も聞いた。

その事件の内容を教えてくれたのはクロノ提督だ。

フェイトが実の母親に酷い事を言われたことも。

だから、必要とされなくなることに怯えを抱いていると。

泣いているフェイトが、凄く小さく見える。
執務官として、若手ナンバーワンのエースとして活躍しているのに、今はその彼女がとても小さく、弱弱しく見える。
だからこそ、クロノ提督に啖呵を切った言葉を自分で思いだす。

『俺が！　一生傍で守ると彼女に約束した！　その約束はあんたにも破らせない！』

あと一歩で、反故にするところだった。
大きく深呼吸をして、肺の中の空気を入れ替えて脳みそに新鮮な酸素を送りつける。
ちゃんと二本足で立っていることを確認して、拳を握ってからフェイトに近づく。
それを見た高町は、フェイトを抱きしめていた手を離して、俺の方に彼女を押しやった。
逃がさないように抱きしめて、改めて小さい身体だと思う。
力を入れたらすぐにでも消えて無くなってしまいそうなほどに儚さを感じる。
それは、いつもの輝いている彼女とのギャップがそう思わせるのかもしれない。

「……そんな事、気にしないって言えたらカッコいいのかもしれないけど、俺はそんなに立派な奴じゃないからそんな事は言えない。だから、正直に話す」

答えてくれなくても良い。
ただ、フェイトに言い聞かせるようにして話す。
俺の答えを聞きたくないのか、逃げ出そうとするフェイトを逃がさないようにさらに力を込める。

相手は管理局で最も早い魔導師。
一度逃げられてしまったら俺なんかでは追いつけない。
「もしもそういう事になったら俺はショックを受けるかもしれない」
だけど、もっとショックだったのは俺がそれに気がつかなった事。
「それでも、フェイトを捨てるなんてことはしない。絶対に」
たとえフェイトから嫌われようとも、守るという約束だけは貫く。
「こうやってまた、俺はフェイトの悩みを分かってやれないかもしれない」
他の奴と同じじゃない、フェイトという人間だから俺は好きになったのだから。
「それでも良ければ、俺はお前の傍に居たい。居続けたい」
一生守ると誓った、あの日の約束を忘れないために。
「だから、答えてくれ。フェイトは俺の事、好きか嫌いかで」
そういう問題じゃないことは分かっている。
さっきもフェイトに好きだと言われた事も分かっている。
だけど、何よりも一番重要なのはその気持ちだと思うから。
これから何があるにしろ、最初はその気持ちから始まるはずだから。
だから、フェイトが泣きやむのを待つ。

もう、逃げ出そうとはしていない。
だけど、抱きしめている手は離さなかった。
答えを聞くまでは、ずっとこのままだ。

そして、数分が経って俺の服がシミを増やさなくなり、フェイトは口を開く。

「……好き、です」

フェイトｓｓ　彼女の事情（後書き）

はてさて、本日のお味はいかがだったでしょうか。
フェイトだったらこういう悩みを抱えるんじゃないかなぁと思ってみたり。

明後日テストなのに自分は何をやっているんだろうと思う作者です。
今月の投降は後二回も出来るかどうか……。
何せアイデアが全くないので。

ではでは次回もお会いできることを願いつつ。
あ、感想はお待ちしております。

なのはｓｓ　帰って来た日

「お邪魔しまーす」

一応挨拶をしながら扉を開けて中に入る。

記憶の無い頃からの知り合いとはいえ、親しき仲にも礼儀あり、だ。

玄関で下を見てみると、見知ったサイズの靴が一足増えている。

つまり、なのはが帰って来たのだろう。

小学三年生の冬に彼女が魔法少女になったことを知り、そのコスプレぶりに爆笑して半殺しにされ、中学生の終わりに魔法世界で働く事を告げられて今までのように会いたい時に会えなくなることを知って別れ話を持ち出したら喧嘩になって半殺しにされ。

……あれ？　俺となのはの思い出って俺が半殺しにされたことしかなくね？

「あら、いらっしゃい」

「帰ってます？」

「ええ、さっき帰った所よ」

俺を出迎えてくれたのはとても三児の母で、しかもウン十代とは思えないほどに若い容姿の桃子さん。

海鳴りの七不思議、年齢不詳の女性とはこの人の事である。

なのはが髪を下ろして隣に経ったらしまいにしか見えない。

なのはも将来は桃子さんのようになるのだろうか。

士郎さんを怒る時のアレだけは真似して欲しく無いが。

そんな事を思いながら階段を上がり、なのはの部屋の前に辿り着く。
大きく深呼吸をして、意図的に動かない心臓を落ち着かせようとする。
久しぶりに会うという事で、俺も緊張しているのかもしれない。
或いは別の何かでこんなにも落ち着きがないのか。
どちらにしても俺らしくないと一人で苦笑して見る。
とりあえず、このドアを開けよう。
話しはそれからだ。

「なのは、帰って来たんだって……な。久し……ぶり」

「……」

着替え中。
それくらいの事が中に入る前に分かるようにして欲しかった。
だって魔法少女なのだから。
というか、こういう場合ってどうすればいいのだろうか。
一応俺達は生まれたままの姿を見せあって大人の階段は既に昇っている訳で、そこまで恥ずかしがるような事……だな。
それとこれとは別問題か。

いやしかし、数カ月も見なかっただけで随分と成長するものだ。
特に女性らしさを強調している部分が。
それはそうと、この空気をどうにかする責任はやはり俺にあるのだろう。

「……なのは、胸、大きくなったか？」

「ッ……バカァアアアア！！」

「ふべらっ！」

意味不明な叫び声をあげて吹き飛ばされる。
アレは確か、ディバインバスターとか言う名前の砲撃。
というか、一般人に向けて魔法を放つなよ管理局員。
まあ、どう見ても非は俺にある訳だが。

何だか、年々なのはの俺に対する扱いが酷くなってきているような気がする。
その内、こうやってツッコミを入れられるだけでスターライトブレイカーが使われるのではないかと思い始める。
そういえばなのはとフェイトが戦った時にフェイトはバインドで動きを封じられてアレを当てられたんだよなぁと、感傷に浸る。
……うん、今度フェイトに会ったら菓子折を持って行こう。
それまでに俺が生きていたら。

何せ、着替え終わったらしい白い悪魔が廊下で屍と化していた俺の事をバインドで縛ってから自分の部屋に引きずっているのである。
これが久しぶりに会った自分の恋人に対する態度かと、三時間ほど問い詰めたい。
そんな事をした所で俺が悪いという結論が変わる訳ではないだろうが。

「ねぇ、人の部屋に入るときにはノックしてって前にも言ったよね？」

「はい！　申し訳ありません！」

「それからデリカシーの無い事も言わないで、って約束したよね？」
「はい！　申し訳ありません！」
「それとアリサちゃんから聞いたけど、後輩の女の子に手を出してるってホント？」
「はい！　申し訳ありません！　……ん！？　待て、反射的に答えたがそんな事は無いぞ！？」
思わず軍隊でやるように答えていたから、最後の質問にも反論を許されないのかと思っていたが、そんな出鱈目を肯定するわけにはいかない。
情報源が情報源だけに、いくらか信憑がありそうだが、しかしアリサの事だ。
どうせ面白くなりそうだからと法螺を吹いたのだろう。
「ホントに？」
「天地神明に誓って」
うむ、流石にそんな事に嘘は付かない。
せいぜいが、ラブレターを貰ったという程度。
フラグは二、三本しか立てた記憶がない。
……あ、それの事か。
ま、良いや。
「……絶対嘘なの」
「あ、久しぶりに聞いたな。“なの言葉”」

小さい頃から良く語尾に、なのなの付いていたから、俺がなの言葉と命名した。

「にゃ！？　そ、そんな事気にしなくても良いの！」

あ、にゃ、も出た。

恥ずかしがってか顔を真っ赤に染めてポカポカと俺の事を叩いてくるなのは。

……何この生き物。

お持ち帰りしていいのだろうか。

――『良いわよ？』

何故だか桃子さんの声が聞こえた。

しかもその背後には気絶している士郎さんがいる。

大方、なのはが欲しければ俺を越えて行け的な事を言って、厨房の裏に連れていかれて桃子さんにやられたのだろう。

ご愁傷さまだ。

……やけにリアルな幻覚だったな。

「うん、なの言葉はともかくとして、俺的に所望するものがあるのだが」

バインドも解いて貰ったことだし、そして変な話も有耶無耶に出来たことだし。

そう思って話を切り出す。

こちらが真面目な表情をしていたからか、なのはの方もポカポカを止めて俺の話しを真面目に聞いてくれている。

感激である。

「何？」

「ただいまのキス、的なものはないのか？」

「……」

「むしろ俺がおかえりなさいのキスをしても良いのだが」

どっちにしてもそういう事がしたいだけなのだが。

いやまあ、真面目な話、数カ月なのはと会えなかった訳で年頃の男の欲望は渦巻いている訳で、今こうして話しているだけで暴走してしまいそうなのだが。

しかも、さっきは下着姿をがん見してしまった訳だし。

ついでになのはの部屋という事で微妙にそういうシチュエーションっぽいし。

「ふむ、沈黙はｙｅｓと受け取る」

どうせなのはは恥ずかしいとかの理由で答えてくれないだろうから、強引に話しを進めて彼女の顎を掴んで距離を縮める。

そしてそのまま事に進めるかと思ったら、唇どうしの間になのはの手が割りこんでいて、その距離をそれ以上縮めさせてくれない。

「ごめんね？　その、休み取るのに忙しくて昨日からシャワー浴びてないから……」

つまり、必要以上に近づかれると困ると。

これは良い事を聞いた。

「……バインド」

「え？」

俺にも一応カスほどの魔法を使えるだけのリンカーコアとか言うものが存在しているらしく、防御とバインドだけは教えて貰ったから使える。

いくらなのはがその道のプロでも、完全に油断している所にバインドをかけるのは俺にでも出来ることだ。

むしろ、今のなのはにバインドをかけるなどという事は俺にしか出来ないような気もするが。

俺にいきなり拘束されて驚いているなのはに、考える時間を与えないようにしてベッドに押し倒す。

逃げられないようにその上に覆いかぶさって、バインドが解けても大丈夫なように両手で両手を塞ぐ。

「つまり、今はなのはの匂いが体に染みついている、と。これは良い事を聞いた」

つまりそれは、クンカクンカしても良いという事なのだろう？

というか、俺にそんな情報を与えた時点で、なのはもそれを望んでいたに違いない、と勝手に自己完結。

彼女の首筋に鼻をうずめて思いっきり空気を肺に流し込めば、久方ぶりのなのはの匂いで身体が充足される。

何だか物凄く興奮してきたのだが、この責任を果たしてなのはは取ってくれるのだろうか。

まあ、もちろんこんなふうにしたなのはが悪いのだから、と勝手になのはが悪い事にして理由を付けておく。

「だ、ダメだってば……ン。シャワー浴びてないし、ひゃ……お母

さんたちも下に居るし……」

首筋に舌を這わせてみれば、何ともなまめかしい声が返ってくる。

それに調子を良くして、今度は耳たぶを噛んでふにふにして見る。

これまた何とも艶やかな反応が返ってきたことに満足して、その耳に吹きかけるようにして囁く。

「別に聞かせればいいだろ？　公認なんだし。匂いとかむしろ興奮するし。というかマジでなのはが拒絶しない限りはとまらないからな？」

「ァン……」

「というかなのはだって期待してたんだろ？　そうじゃなきゃわざわざ家の中でミニスカに着替えたりしないし」

「……」

「じゃ、頂きます」

両手を合わせて食材に感謝をこめてから、その果物に吸いつく。

いきなり舌を差し込んで蹂躙してから、吸い出すようにして引っ張り出す。

それを一分ほど続けてから、呼吸が続かないが為にいったん中断。

もう此処まで来てしまったら、なのはが嫌がらない限りは止められない。

バインドも既に効力を失っているし、貧弱な俺のことなど、なのはがその気になればいつでも吹き飛ばせる。

だから、何も言われないのをいいことにそのまま果実の実る丘を眼下にさらすべく、手を服にかける。

「……バインド」

が、その直前でなのはがバインドを使って俺の四肢を封じる。

俺のカス魔力ではバインドブレイクなど出来ないから、これをされてしまったら俺には何もする術がない。

「ごめんね？　ホントは不安だったから確かめただけなの。でも盛りのついた犬みたいになってたから安心したというか、逆に不安になったというか……とにかく今日はお母さんたちいるから、ね？」

「つまり、お預けかよ……ま、仕方ないけど」

「じゃあ私はシャワー浴びてくるね？　……覗いたり入ったりしちゃダメだからね？」

入ったらお話――砲撃魔法――だよ、というのが副音声で聞こえたが決して気のせいではない。

むしろ入ったらその瞬間にヤラレル。

多分、その体を二度と拝むことは出来なくなってしまう。

俺にギャグ補正は付いてないし。

――バタン

「……え？　そのまま出て行く訳？　バインドは？　せめてバインドは解いてけよ。っておーい。無視ですか？　……そうですか」

アリサｓｓ　彼にとっての勝利

「すまん！　かくまってくれ！」

息切れする直前で隣の教室に逃げ込み、入口から一番近い席に座っていたすずかに声をかける。

そしてその返答を待つでもなしに矢継ぎ早に事情を説明。

「アリサが来たら俺は帰ったって」

それだけの説明をして、掃除用具が閉まってあるロッカーに入り、扉を自分で閉める。

そして扉が閉まってから二秒後、物凄い形相をしたアリサが教室に姿を現す。

いつも綺麗な髪は乱れ、美少女と称えられる美貌は地獄の鬼も裸足で逃げ出すほどに怒り狂っている。

手には何故か竹刀を持っているが、剣道部から拝借したものであろう。

木刀で無いのがせめてもの救いか。

やはり逃げたのは正解か、と一人ロッカーの中で安心する。

確かに今日も悪いのは俺だが、だからと言って諦めてお縄に付くなどという事は許容できない。

今日は学校帰りに寄り道してエロゲーを買おうと思っていたのだから。

もちろん、私服も用意してある。

だから今日はアリサに捕まる訳にはいかない。

そんな事になれば家宅捜査で俺のブツが焼却炉行きになることは目に見えている。

しかし……その話を教室で振って来た奴は後で血祭りにあげると

しよう。
そして絶対に貸さない。
などと決意を固めていたら、いつの間にアリサがすずかに事情を説明し終わったらしく、改めて居場所を吐くように迫っていた。
頼むすずか、いや、女神様。
と拝んで祈っていると、すずかはどうするべきなのかを俺にアイコンタクトで聞いてきて、俺はそれに激しく首を振る。
その際にガタン、と音が鳴り、教室で騒ぎを傍観していた女子の一人が「あっ」と声を出す。

「そこね」

まさしく獲物を見つけた目でアリサがロッカーに振り返って、逃げ場のないことを知る。
ゆらり、と何かオーラのようなものが立ち上っているかのような気がするのは決して気のせいではないだろう。

観念した訳ではないが、ロッカーから出ると、まるでヤンデレのように彼女は笑う。

「みぃーつけた♪」

教室中が俺に対して合掌。
宗教の違いからか、胸の前で十字を切っているものもいる。

「落ち着けアリサ、話し合えばわかる」

用具入れから取り出した箒を手に、停止を呼びかける。
護身術を習っているアリサに対し、威嚇にもならないが一応構え

る。
投げれば隙も出来るはず。
そうなれば逃げ出せるだろう。
「観念して捕まりなさい。それとも死にたいのかしら？」
いえ、まだ死にたくないです。
やり残したこともあるし。
というか、
「観念した所でどうせ死ぬ運命なら俺は最後まで諦めねぇ！」
少年漫画の最後の戦いのような展開に、主に男子から拍手が上がる。
何だか周りが期待を込めて俺の事を見ているが、残念ながら俺はカッコいいことはできない。
だから、いつもの展開になるか、或いはどうにか隙を作りだして逃げるだけだ。
「そう……残念ね」
そう言ってアリサは竹刀を上段に構える。
それに反応して、箒を握る手に力が入る。
アリサが攻撃に移るその瞬間を見極めるべく、真剣にアリサの事を見つめる。
相変わらず綺麗な目だなぁと思っていたら、思わぬ副産物。
アリサが顔を赤くして恥ずかしがっている。
その姿を見て不覚にもこちらも恥ずかしくなったが、しかしこのチャンスを逃さずに俺は箒をアリサに投げつける。

「ッ！」

同時にスタートを切って逃げ出す。
が、足にダメージを受けてたたらを踏んでしまう。
一体何が起こったのかと思っていたら、足元には箒。
どうやら俺が投げたそれを打ち返したらしい。
どんな反射神経だ全く。

「さて、覚悟はいいわね」

目の前にはいい笑顔のアリサ。
目だけが笑っていないが。

「良いのか？　今ここで俺を殺すと後悔する事になるぞ？」

などと強がりを言って処刑の時間を先延ばしにしてみる。
その間にどうにかして逃げ道を探そうとしたが、生憎と思考能力が正常に働いていない。

「後悔ならもうしたわ。あんたから目を離したその瞬間にね」

一歩一歩、距離を詰めてくるアリサ。
一つだけこの絶望的な状況から抜け出す策を思いついたが、もろ刃の剣。
使えば確実に俺もダメージを受ける。
が、他に策も思いつかないから仕方がない。

「アリサ！　愛してるぞ！」

無駄に大声で叫んだら、傍観者から歓声が上がった。
口笛も聞こえる。
問題のアリサは……耳まで真っ赤にしている。
まあ、俺も精神的に死にたくなるほどのダメージを受けているのだからそれくらいの効果はないと困る。
これでアリサの怒りが収まれば……。

「……あんたは」

あ、これはヤバい。
逆効果だったかもしれない。

「いきなり何を言い出すんじゃぁあああ！」

まっすぐに俺めがけて振り下ろされる竹刀。
目を瞑ってくるべき衝撃に耐えたが、それが訪れない。
恐る恐る目を開けると、いつの間にか俺は両手で竹刀を受け止めていた。
自分でも驚きである。
もしかしたら生命のピンチに身体が勝手に反応したのかもしれない。

「ふっ！　アリサ・バニングス恐れるに足らず！」

「くっ！　このっ」

いくらアリサが護身術を習っていると言っても、力は俺とそう変わらない。
どうにかして俺の手を剥がそうとしているが、命綱を切る訳にもいかないから俺は力を全く緩めない。

まあ、蹴ったりしてこないのはやはりアリサの正常な思考が先ほどの言葉で失われた為だと考えていいだろう。
そう考えるとやはり先ほどのこっぱずかしい台詞が確実にアリサにダメージを与えているという事を再確認できて、何だか一歩優位に立っているような気がする。
悪い気分ではない。
基本、アリサはツンデレだが俺にデレてくれる時は二人っきりの時でさらには機嫌のいい時だけ。
こんな風に圧倒的に優位に立っているチャンスを逃すほどに俺は甘くはない。

「……？」

いきなり二人の間の距離を縮めた俺に対して、その力は抜かないまでも、アリサが不審に思い始める。
だが、今が絶好のチャンスなのだ。
ここでアリサを辱めて、なおかつ自分が安全に逃げる為に。

故にアリサの顔に自分の顔を近づけて、アリサがそれに驚いて真っ赤になっているのを確認し。

「ふぅー」

「ひゃん！」

耳に息を吹きかければ、何とも可愛らしい声をあげてアリサは腰を抜かす。
ペタンと尻を地面につかせてしまって、意図していなかった俺の攻撃の前に完全にやられてしまったらしい。
衆目の前でアリサの声を聞かせることはあまり気分のいいもので

はないが、それでも彼女が可愛らしく嬌声をあげた事に対する喜びの方が大きい。

「中々可愛い声だったぞ、アリサ」

そう告げてから、いち早くそこの教室から抜け出して、自分の鞄を取りに向かう。

直前に見たアリサは、ポーっとして意識此処にあらずというところだった。

自分がそうしたのだ、という事を思い出してその姿を見てしまったが故に、その可愛さにやられそうになって一瞬だけ足を止めてしまった。

恐るべし、アリサ・バニングス。

ただ座っているだけで俺にダメージを与えようというのだから。

久々の勝利をかみしめながら、俺は寄り道を急いだ。

結果としてブツを手に入れることは出来たが、プレイの最中にアリサがいきなり俺の部屋に乱入してきて、その日は半殺しにされた。

どうやら同級生の前であんな姿をさらし、声をあげてしまったことで大恥をかいたらしい。

ちなみに、俺はその日のアリサの襲撃で全治一カ月の怪我を負って入院する事になった。

まあ、甲斐甲斐しく毎日アリサが通って世話をしてくれたからこれはこれで得をした気分を味わえたが。

アリサｓｓ　彼にとっての勝利（後書き）

月曜日からテストだというのに一体何を妄想しているんだと思いました。
やはり一番書きやすいのはすずか。
これは間違いない。
そしてはやてをどうするかが全く思い浮かばない今日この頃。
評価がじわじわ上がってきていて、読者にも妄想癖がある人がいるのだろうかと思いつつ。
そろそろ蜂蜜のシロップがけを目指した方がいいのだろうか……？

すずかｓｓ　冬の勉強の仕方（前書き）

始めはセンター試験にあやかってそれ関連で書こうとしたのにいつの間にかこんなことに。
作者の欲望がそのまま吐きだされてしまった。
今回はｓなすずかさんではなく、ちょっと初心（うぶ）なすずかさん。
やはり彼女が一番書いていて楽しい。

今回はふんだんに甘味を使っているので、ご賞味した後は歯磨きをお忘れなきように。
それでは召し上がれ。

すずかｓｓ　冬の勉強の仕方

手が、少しかじかむ。
頭を動かしつつ、ちっぽけな脳みそで考えたことを手にしているシャーペンで紙に書き連ねていく。
フジョ、ふじょ……一体どういう漢字だったかと思いだしながら目の前をちらりと見てみれば、警戒にシャーペンを紙に走らせているすずか。
その顔は難しい問題に頭を抱えて歪んでいるなんてことはなく、むしろ楽しそうに問題を解いている。

「……？　どうかした？」

ふと、すずかが解いている様を眺めていることを疑問に思ったらしく、そんな事を聞かれる。
センターのような問題を解いていたら時間制限があるからこんな風に顔を視線を合わせるような事も、話しかけられるような事も無かったのかもしれない。
普通に勉強しているからこそ、こうやって彼女は話しかけてくるのだろう。

そんなどうでも良い事を思いながらも、視線は彼女の顔を舐めまわすように動く。
我ながら言いえて妙だ、と思いながらも視線は目から睫毛、鼻に降りて唇で一旦とまった後、頬に移動して耳へ。
相変わらずパーツごとにそれぞれこの世で最も優れたものをえりすぐって集めたのではないだろうかと思えるほどに、それは全て輝いているかのような印象を受ける。
実際のところ、蛍光灯の灯りを受けて光っているのかもしれない

が。

「フジョ、ってどういう漢字だっけ？」

「こうじゃない？」

そうやってすずかは、ルーズリーフの切れ端に“扶助”と書いて見せる。

向かい側から見ているから反転していて、それに気がついたのかすずかは紙を反転させて、見やすいようにしてくれる。

そんな配慮をしてくれているというのに、視線はその漢字ではなく、その奥の秘境とも呼べる場所へ。

つまり、紙を反転させてこちらに見せるために前に押しやったが為、自然と前かがみになって視界に飛び込んできた胸へ。

家の中ではあるが、冬だというのにゆったりとした服を着ているから、ちょっとのことで胸の隙間から下着が見えてしまう。

今日は紫か、などと一人心の中で呟きながらそれを観賞する。

「……どうかした？」

俺が反応しないことを不審に思ったのか、すずかは尋ねてくる。

その声に反応してはっと意識を覚醒させれば、さらに前かがみになってこちらを下から覗き込むようにしているすずか。

その純真な笑顔は、俺の精神に五寸釘をうちこむには十分すぎた。

「何でもない……」

思わず一瞬見とれてしまいそうになるほどの笑顔で「そっか」とすずかは微笑む。

いや、見とれてしまいそう、などではなく常にその笑顔には見と

れているのだろう。
先ほどから中々勉強が進んでいないのも、全て目の前に居るすずかのせいだ。
そもそも、彼女とこうして勉強をするという提案自体が間違っていたのかもしれない。
しかもわざわざ俺の家でやることはないだろうに。
部屋には暖房器具がなくて、あるのは祖父母の家からお下がりで貰った炬燵が一つ。
だから、二人で一緒にそこに入り勉強している訳だが、だからこそ全く集中できない。
少し足を延ばしたら、すずかに触れる事が出来るのだ。

そんな事を思っていたら、先ほどのすずかの紫と相まってマイサンが元気になる。
幸いにして炬燵の中に潜り込んでいるからその活発な具合がすずかにばれることはないが、これはかなりの真綿作戦。
最近、すずかは狙って俺の理性を削ろうとしているのではないかと思えてきた。
わざわざ冬に胸の辺りが空いた服を着なくても良いだろうに、おしゃれをしてくるし。

必至でマイサンをなだめながら、国語の問題を進めて行く。
現代文は数十分もかからずに終えて、次に開いたページは古文。
何で古典から先にやっていなかったのかとここにきて思う。
まあ、すずかに意識が集中していたからこっちに脳みその容量を回す余裕がなかったのだろうが。
何とか問題を解こうとして、だがしかし、そこで逆効果に襲われる。
ベタな出題の古文は、源氏物語。
つまり光源氏が数多の女性を落とす物語であり、殆どが恋愛の話

で構成されているこれは、すずかに意識を戻してしまうには十分な内容だった。

「どうしたの？」

ふと、気が付けば自分でも知らない内にすずかの手を握っていた。
これが孔明の罠か、などと自分の行動を偉人のせいにしてみる。
だからと言って何かが変わる訳ではなく、すずかの純真な笑顔はじりじりと俺の理性ポイントを削っていく。
本当にこの娘は何がしたいんだろうか。
大体、分かっているんだろうか。
今この家には俺と彼女しかいないという事に。
いや、分かっていないんだろう。
だからこうやって俺の理性を削るのだから。

「手、冷たくないか？」

それは言い訳。
炬燵しか暖房器具がなくて、部屋の温度は人肌で温められることになるから、動かしていると言っても手は冷たい。
加えて省エネ志向で炬燵の温度は一番低く設定してあるから、少し着込んだ状態で炬燵に入るという何とも間抜けな事をしているのだ。

「だから、暖めてくれるの？」

「ん。ま、そんなところ」

握っていないもう片方の手で、すずかは教科書を閉じる。
そしてその手で、俺の手に重ね合わせてくる。

小さくて、細くて、やっぱり少し冷たくなっている手。
真っ白なそれは、雪を思わせる。
「炬燵の中に入れた方が暖かいんじゃない？」
「こうして見える所ですずかに触れてたい」
提案は即刻却下。
確かに中に入れた方が暖かいかもしれないが、そうしてしまったらすずかと手を繋げなくなってしまう。
そんなことでは、手が暖かくなっても意味がない。
こうしてすずかと繋がっている事に意味があるんだから。
そんな事を目で語りかけてみれば、意味が伝わったのかは分からないが、それでも顔を真っ赤にさせて俯く。
そんなふうに、一々初々しい反応が嬉しくてたまらない。
既に肉体関係も持っているというのに、こうしてイチャイチャする事に恥ずかしさを覚えてくれるのは男として冥利に尽きる。
だから、ついつい苛めたくなってしまうのは御愛嬌。
「すずかは俺と手を繋ぐのは嫌だったか？」
「……ばか」
唇を尖らせて、そんな事を呟く。
手で俺の甲をつねってきて、いじわるに対して反抗するようにしている。
正直、既に理性という言葉は俺の辞書の中から消え去ってしまった。
彼が戻ってくるのは来月あたりだろう。
そしてこんばんは、本能。

すずかがあまりにも可愛らしい事を素でやってくるものだから、本能という名の欲望に支配されて炬燵の中ですずかの足を俺の足で封じる。

「え？」

何をやっているのか、という疑問か、或いは俺がいきなり動いたことに対する驚きか、すずかはその一言だけをあげて甘ったるい雰囲気から覚醒する。

左足一本ですずかの足を押し付けるようにして動きを封じて、右足はそのまま炬燵の中の上の方へ。

見えていないが、大体この当たりだろうと当たりを付けて親指で目標を突く。

「！　あっははははっ……だめっ……やめっ」

すずかの脇腹を足でくすぐって、悶えている所へすかさず押さえつけていた左足もくすぐりに追加させる。

両手は俺の手で握って動かせないようにしてあるから、手でそれを止めることはできない。

止めてと言われても、止める奴はいない。

まあ、やりすぎたら泣かれるから俺が満足できてすずかがいじけない様な微妙なタイミングで止めるが。

「やめっ……っ……もうっ！」

「ぬっ！？」

涙目になっていたすずかが、いきなり声をあげたかと思ったら、

くすぐっていた俺の足を彼女の足が外側から抑え込むようにしてくすぐりを強制的に止めさせられた。
どうにかして足を抜け出させようともがいてみたが、完全に抑え込まれていて身じろぎする事しかできない。
諦めて意識を足から離してみれば、すずかは息を整えていた。
目の端からは少し水滴がこぼれ落ちていて、若干赤くなった頬にそれが垂れる。

「もう……お返しっ！」

「おいっ……ちょ……っっっっ」

にやりと笑った後に、すずかは実に楽しそうに笑顔になりながら同じようにして俺の事もくすぐってくる。
予想していなかった反撃に、へんてこな声を上げざるを得なくなり、笑い声を洩らさないようにしていたら声にならない声をあげてしまう。

「ごめんなさいは？」

「っ……誰が……」

いつも苛めていることへの反撃のつもりか、すずかは実に楽しそうだ。
だがまあ、俺としても一方的にやらせておくつもりはなかった。

「あっ！　もうっ……このー！」

「ぬっ！？　くっ……！」

お互い、炬燵の中でのバトル。
互いに互いの足を封じ込めようとして、激しく動かす。
たまに足が天板に当たったりするが、何故だか薄型の炬燵のおかげで痛くはない。
外で遊んでいる子供のような天真爛漫な笑顔ですずかは一生懸命になっていて、そんな姿を見ているだけでお腹いっぱいになる。
お互いに本気でやっている訳ではないが、勝負の終着はあっけなく訪れる。

「やった！　……あれ？　なんか固いものが……あ／／／」

「おふっ……」

揺れるたわわな果実を眺めていたら元気になっていたマイサンが、すずかのストッキングに包まれた足にやられて撃沈。
一人で喜んで、疑問を抱いて、理解したすずかは一で十を把握しておでこを机にくっつけることで俺に顔を見せないようにしながら顔を赤くしている。
赤くなっているのが分かったのは、すずかが耳から湯気まで出しているから。

しかし正直なところ、顔をふせたいのはこちらである。
だがまあ、すずかが恥ずかしがっているのも分からないでもないが。
お互いに無言のままいたたまれない空気が続いて、俺は何と弁解したものか、それとも開き直るのが正解なのかと悩む。

「その……」

そうやって数分が経った所で、すずかは真っ赤にした顔をゆっく

りと持ち上げて視線を合わせてくれる。
まあ、何と言うか何も言ってくれないよりはましだが、こうやって改めて視線を合わせるというのも恥ずかしいものである。

「……したい、の？」

……ぐはっ

心の中で吐血。
伏せがちな視線で恥ずかしそうに聞いてくるその顔は、今日一番の破壊力を持っていた。
例えるならば、先ほどまでの笑顔はスタングレネードで、今のは大陸間弾道ミサイル。
正直自分でも何を言っているのか分からない。

「……ぶっちゃけるならば今すぐにでもすずかを押し倒して食べたい」

正直に告白。
その後どういう展開になったかは推して知るべし。
だがまあ、一言で言うならば御馳走様でした、と。

すずかｓｓ　冬の勉強の仕方（後書き）

作者の両手が勝手に動いてしまう。
今日からテストが始まったというのに、明日の勉強を今から始めようという堕落ぶり。
これも全てすずかさんのせいに違いない。
何だかこれから先、彼女しか書けないような気がしてきた。

すずかｓｓ　風邪をひいて（前書き）

感想ですずかに血を吸わせてほしいとご要望があったので。

それにしてもすずかさん可愛いなぁ。

すずかｓｓ　風邪をひいて

「あー……」

傍から見たら変人にしか見えないような声をあげて布団の中で呻る。

ぐらぐらと視界が揺れていて、頭が痛い。

熱を測ってみたら見事に９℃超え。

身体の節々も何かが詰まってしまったかのように痛みが走り、起き上がる気力もなければ食欲も依然として湧かない。

完全に風邪だ。

季節の変わり目でもないというのに風邪をひいてしまうとは予想外にも程があるというもの。

予想の範囲を二段階ほど飛び越えている。

まあ、どう見ても昨日雨の中傘を貸してしまって濡れながら帰宅したからだろうが。

「入るよ？」

風邪をひいてとうとう幻聴が聞こえるようになったかと思っていると、ドアをノックする音とともにドアの外から人の気配。

返事をしようにも、そんな気力が有り余っている訳でもなければ幻聴にわざわざ答えても意味がないので放置。

「あ、起きてたんだ」

「ん」

気だるい気分の中でふとそちらに視線をやってみれば、先ほどの声は幻聴ではなく実際に耳に届いていた声だった。
まあ、今見ているすずかの姿が幻覚ではないという条件下だが。
むしろ幻覚が見えていて幻聴が聞こえるなら末期症状だし、これで死ぬというなら死ぬ間際をすずかに見取って貰えるのは幸運か。
幻覚か、はたまた実在か、どちらにしてもすずかに見える目の前に居る人物は、手にしていたお盆を俺の散らかっている机の端に置いて、こちらに歩み寄ってくる。

「……まだ熱があるね」

額に手を当てて熱の有無を確認した後に、そう告げられる。
そういえば、すずかが幻覚ではなく実体を伴っているのだとしたらこの御仁は俺の家に勝手に入ってきて俺の部屋まで勝手に上がって来たのだろうか。
別段セキュリティーが甘いとかそういう事はないから、母が彼女を招き入れた……のか？
確かに何度か家には招待しているから顔見知りだろうが……。
ああ、なるほど、幻覚か。

「おかゆ、作って来たから食べて？」

「……」

すずか（幻覚）はおかゆを一口分蓮華にすくい取り、ふーふーと息を吹きかけてそれを食べやすい温度にまで冷まし、

「はい、あーん」

俺の口もとに運んでくる。

――なるほど、幻覚だからこんなに大胆なのか

最近の幻覚は凄い。

何せ、お粥の味付けに使われているであろうものの匂いまで再現してしまうのだから。

しかも３Ｄ。

幻覚の技術も進歩したものだ。

……可愛いなぁこの野郎。

「食欲無し」

せっかくふーふーからアーンのコンボが繋げられているというのに、こんな夢のような状況だというのに、口をレンゲが入る分だけ開く気力もない。

これが実体を伴っているのだとしたら流石に作ってもらった食材を無駄にする訳にはいかないから食べるのだが、幻覚だからこそ許されることだろう。

むしろ、人の家に上がり込んでお粥をいつの間にか作っているという状況そのものがあり得ない。

「ダーメ。一口でも良いから、ね？」

まるで小さな子供をあやすようにしてすずか（幻覚）は首をかしげながら言う。

男なら此処に至る前のアーンの段階で既に詰んでいるだろうが、生憎と幾たびのすずかのピンク攻撃にさらされて耐性が出来ていて、しかも風邪で気力が削り取られている俺にとってはそれくらいで屈する事はない。

「ムリっす」

故に、一言で斬って捨てる。
そうしたらこの幻覚、寂しそうな顔をするのだからやるせない。
まるでこちらが悪いことをしているかのような罪悪感にかられる。
いや、実際に俺が悪いのかもしれないが。
しかしどうして幻覚相手に罪悪感を感じなければいけないのだろうか。

などと、風邪で弱っている精神的ポイントをがりがりと削ってくるすずかに対して、防衛論を張る。

「自分で食べないなら無理にでも食べさせるよ？」

そんな事を言われては口を閉ざすしか無くなる。
何だかもう既に、俺とすずかのどうにかして食べるか食べないかのバトルに発展しているような気もしないでもない。
何で幻覚相手にそんな気を使わないといけないのかとも思ったが、これはこれで良い暇つぶしになるから嫌でもない。
むしろ、幻覚だからこそ出来ることだろう。
普通のすずかであればまずこんな風に積極的な行動は起こさないし、何よりもアーンなどという核弾頭レベルの威力を発揮する武器を使うのは俺が頼みこんだときだけだ。
そして何よりも、ふりふりのエプロンを着ている事が幻覚だという事を証明しているようなものだ。
あんなにコスプレを嫌がっていたのに、そんなふりふりをすずかが着るわけがない。
すずかが着用するとしたら、もっと質素で黒とか紫のエプロンに決まっている。

などと幻覚のありがたみをひしひしと感じながら脳内のハードディスクにすずかのエプロン姿を保存していたら、何を思ったのかすずかは自分でお粥を食べ始めた。
いや、食べたのではない。
レンゲに救っていたお粥を、口に含んでいた。
そして静かにレンゲを置くと、俺の方へ向いてさも意味ありげな妖艶な笑みで振り返る。
その動作はゆっくりで、こちらをじらしているようにも感じられれば、焦っているようにも感じる。
そしてすずかはその綺麗な目を閉じてそっと俺の頬に両手を添えて、

「ん……」

そっと唇を合わせてきた。
最近の幻覚は触覚もあるらしい。
随分と技術が進歩したものだ。

などとパニックになって変な事を考えていたら、いつの間にかすずかが舌でもって俺の唇を強制的に開かせると、口の中にあるものを直接送り込んでくる。
口の端からこぼすわけにもいかず、それをただ黙って受け入れるしかなく、ホタテの貝柱を干した奴のうまみが口の中に広がる。
そして、何故か甘い。

「ん、くちゅ、んぁ……」

味覚が殆ど使いものになっていないが、それでもすずかから送りこまれた物を全て呑みこんだ所で、すずかはそっと唇と舌を離す。

呑みこみ終わった所で目を開けると、そこには当然のようにすずかの顔があって、何だか上気したように頬が赤くなっている。
はらりと重力に従って垂れている髪が俺の頬を撫でる。

「……どうだった？」

それは何に対する質問なのだろうか。
味か、それとも今の口移しについてか。
だがしかし、分かった事が一つある。

「貴様、幻覚じゃないな？」

「……ハァ」

何でか呆れたように溜息をつかれる。
俺としては今まで幻覚だと思っていたものが実は実体を伴っていて、つまりは今目の前に居るすずかが本物だという事に驚いたりしているのだが。
だってあのすずかがふりふりのエプロンをつけてフーフーアーンまでやった後に口移しだぞ？
声を大にして叫びたい。
すずかは俺のものだと。

「普通は美味しかったよ、とか、もう一回、とか言うところでしょ？」

「美味しかったよ。もう一回」

「……ごめんね？　期待した私がバカだったみたい」

何でだろう。
要求された答えを完璧にしたのにまたもや呆れられた。
理不尽だ。
既に俺の頭は茹でダコも真っ青に変色して気味が悪くなりそうなほどに茹であがっているというのに、すずかの方は全くもって動じていない。
いや、彼女から自分で行動したのだから恥ずかしがるようなことではないのかもしれないが。
まあ良い。
風邪をひいたことですずかがこんな風に看病してくれるというのなら、これからは月一回くらいの頻度で風邪をひこう。
ちなみに何だかんだ、すずかは最後まで口移しで食べさせてくれました。
まる。

そんなわけでお粥も食べ終えて、薬も飲んで、後は寝て体力を回復するだけという状況。
薬は流石に錠剤なので口移しはして貰えなかった。
寝ようと思って布団に入っていれば眠れるというものではない。
すずかがお粥が入っていた空になった土鍋を台所までもって行ったが、帰ってくるまでの間に眠る事も出来なかった。
何せ、すずかが来るまでの間はずっと寝ていたのだし。
いや、理由はそれだけではない。

「うーん……これは良いけど……こっちは」

俺の部屋が散らかっていて整理整頓が出来ていない事が許せなかったのか、すずかが俺部屋を片付け始めたのである。

そして顔を動かすほどの気力は回復していたが、無駄な体力を使わないために視線だけを動かして横目にその姿を見てみれば、真剣に雑誌をめくりながら二つの山に分けて積み重ねているすずか。

そう、秘蔵本が分別されているのだ。

「待て待て待て。やっぱり幻覚だな！？」

いや、むしろそうでないと困る。

部屋を片付け始めたと思ったらいつの間にか秘蔵本を探し当ててそれを流し読みしながら選定しているのだから。

このままでは何時の日かすずかに着せようとたくらんでいたコスプレ服の数々も探し当てられてしまうかもしれない。

そんな事になったらすずかに何をされるか……。

間違いなく、その弱みを言いふらすなどと脅されて外での腕組を要求されるに違いない。

そんな事になったら俺は間違いなく外で失神する。

恥ずかしくて。

「制服ものが多いんだけどどういう事？」

「……申し訳ありません。以後気をつけます」

幻覚だと願っていたら、あえなく撃沈。

というか、俺の前でパラパラとめくって見せないでほしい。

いや、ホント謝るから。

「貸し15ね」

「いや、多いだろ。せめて3くらいに――はい。すみません。私めが悪うございました。だからどうか楽しそうにそれを捲るのをやめていただけないでしょうか」

このお方、本当にいい笑顔で笑う。

そういう本を持っていたことを怒らないのはありがたいが。

いや、むしろ怒ってくれる方が良かったかもしれない。

性癖とかばれずに済んだだろうし、貸しも作らなかっただろうし、こうして証拠写真を取られるなどという事も無かったはずだ。

何でこんなことに……。

「これから毎日学校行く時は手を繋いでね？」

「ムリ――あ、いえ。決して無理などという事はありません。むしろ喜んで！」

ムリ、と言おうとした所ですずかがいきなり部屋の扉を開けて母を呼ぼうとしたものだからすぐに降参。

「それからデートは一週間に最低一回」

「……金がないから無理です」

「へー……こんな本を買ってる余裕があるのにお金がないんだ。何で？」

「申し訳ありません。ご要望は必ず」

またもや撃沈。
もうどうなっても良い。
俺の自由時間と最低限のプライバシーすらも確保されないのだから。
一か月に一回は風邪をひいても良いとか思ってた一時間前の俺、死ね。
おかげでコスプレの衣装がこれ以上増えないかもしれない。
……仕方ない、この先は八神に頭を下げて貸して貰うか。

「うん。よろしい」

ニッコリと、天使のようで悪魔の笑みを浮かべてくる。
いいようにされているというのに、それでいて全く嫌悪感を感じないのだから困ったものだ。
これも惚れた弱み、という奴なのだろうか。

「あのー……一応聞いておくけど何をやっているので？」

「何って布団に入ろうとしてるんだよ？」

いや、何よその“何言ってるの？”みたいにこっちを憐れむ目。
俺か？　俺の方がおかしいのか？
そんなことはないだろ。
普通に考えて年頃の男女が同じ布団に入るとか倫理的に間違ってるし、しかも病人の布団に入るとか風邪がうつるかもしれないのに。

「風邪、移るぞ？」

「そうなったら今度は看病してもらうから大丈夫」

あーあ。
ダメだこりゃ。
何がってこうやって同じ布団にくるまってる今の状態が自分でも信じられないほどに安心出来てしかも喜んでるんだから。
まあ、間違っても夜のプロレスに突入する事はないだろう。
風邪で体力が無くなっているのにそんな事をするほどに俺はバカではない。

「ん。匂いがする」

そりゃそうでしょう。
首筋に鼻をうずめてスンスンされたら匂いがしない方がおかしいって。
しかもこっちは風邪で寝込んでたから風呂に入ってないんだし。
つーか止めようね？
そうやって俺の事を誘惑するの。
こっちは風邪ひいてるんだから絶対にやらないからな？

「おいこら。胸を当てるな」

「気持ちいいでしょ？」

「だから俺の残り少ない理性を削るな」

「人間は本能に従って生きてるんだよ？」

もうヤダ。
耳元でそんな事を言うな。
ここで手を出したら負けだ。
確実に明日大変になることは目に見えている。

手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。手を出しちゃダメだ。

「すぅー……ん。ごめんね？　我慢できない」

抱きついてきて匂いを嗅いでいると思ったら、そんな事を言っていた。

というか、言っていた事に気がついたのは次の行動の後。

俺は決意を新たにしていた途中だったのだから。

「かぷっ。ちゅー」

何故だか、ちゅるぱやという言葉が頭に浮かんだが気のせいだろう。

いや、そんな事はともかく。

首筋に鋭い痛みが走ったと思ったら、すずかが血を吸っていた。

夜の一族とか言う特殊体質で、何でもこうやって人間の血を吸わなければいけないらしい。

詳しいことは知らないが、異性の血でなければならないのだとか。

面倒な事だが仕方ない。

性癖の一種とでも思えば、吸血鬼プレイをしているのとあまり変わらないのだから。

「ぷはっ」

十分献血を終えて、すずかは傷を付けた俺の首筋を一舐めする。

そうするだけで首筋の傷はすぐに塞がって、何事も無かったかの

ように戻る。
それも夜の一族の能力らしい。
すずかが舐め終わった後に反転して顔を向けてみれば、何とも満足した表情のすずか。
病人に献血させたのだから満足していないと困るのだが。
というか、風邪をひいている病人の血を吸っても大丈夫なのだろうか。
まあ、俺には分からないことだが。
「……美味しかった。御馳走様でした」
唇だけのキス。
その後でそんな事を言われた。
至近距離で、しかも上気した頬で、さらにはとろけるような笑顔でそんな事を言われて、無駄に心臓の鼓動が早まったのが自分でも分かる。
いらいらする。
何でこんな風に一々すずかの行動にときめかなければいけないのか。
何で俺だけがこんなにもドキドキしなければいけないのか。
どうして俺がすずかを苛める側ではないのか。
「私の事も食べる？」
「……キスだけだ。いいな？　キスだけだからな？」
確認も込めて、そんな風に言う。
随分と恥ずかしい事を言っているような気もするが、まあ頭が沸いてるから仕方ない。

責任は全てすずかにある。
こうやって俺の事を誘惑してくるのがいけない。
そうやって言い訳をしてとうとう唇が触れ合う理由を作ってしまい、それを好機と取ったのかすずかはこちらに舌を割りこませてくる。
条件反射か、それとも自分で意識的にやったのかは覚えていないが、すずかの舌の動きに合わせるようにしてこちらも舌を動かす。
多分、条件反射だったのと、すずかに言いようにされているのが気に食わなかったから攻めの側に回りたかったのだろう。
そしていつの間にか二人とも服を脱ぎ散らかしていて、決意する。
今日こそは俺のターンだと。

そして思う。
さっきの決意は何処に行ったのだろうか、と。

すずかｓｓ　風邪をひいて（後書き）

テスト勉強の息抜きに書いてみたら、いつの間にかこれに二時間近く時間をかけてた。
恐るべしすずか。
これが夜の一族のなせる業か。

次回は相合傘を使ってみようかと。
作者の妄想はとまらない。

すずかｓｓ　とある雨の日（前書き）

久しぶり（？）の更新。
まだ明日も試験だというのに、何をやっているんだろうかと書き上げた後で反省した。
しかし、これもそれも全てすずかさんが可愛いのがいけない。
すずかにはいい加減に自重してほしいものだ。
……と、すずかのせいにしてみる。

すずかｓｓ　とある雨の日

「参ったな……」

聖祥大付属高校、その一番高い所にある一室。
白を基調として少しばかり古めかしい本棚やその他時計などの必要品が飾ってあり、大きすぎる机などは年代物の証としていくつか古傷が付いている。
その部屋の中、窓に一番近い所に置いてある机の向こう、ギシッと軋んだ音を立てた椅子に座っている。
仕事に寝中していて、気が付けばいつの間にか下校時刻に。
そして帰ろうかとした所で、もう一つ気が付けば窓の外は薄暗くなっていた。
夕方を通り越して陽が落ちていたから、という事だけではない。
雨が降っているのだ。

「傘持ってきてないぞ」

昨日は予報では３０％の降水確率だったから、傘はいらないだろうと予想して来たのに、外では大雨。
まるで台風でも上陸しているのかと思わせるほどに酷い。
そして何よりも悪い状況はもう一つある。
まさに泣きっ面に蜂、という諺は今の状況を表す為に作られたのではないかと思えるほどだ。

携帯を開いてみれば、そこには二通の未読メール。
一通目を開いてみれば、そこに書いてあったのは――

『何時くらいに終わりそう？』

短かったが、用事を聞くだけだったのだからこれくらいがちょうどいいだろう。
ましてやこちらは返答として絵文字を使うとか、そういったことは出来ないのだから。
人生で今まで打ってきたメールの中で、絵文字を使ったことは一度たりともないかもしれない。
そして二通目も同じ人物から、開いてみれば――

『返事が無かったから（ＴｏＴ）　先に帰ってるね　生徒会のお仕事頑張って（ｏ　＾０＾）ｏ』

先に帰っているとのことだった。
仕事に集中しすぎていて、どうやら一通目のメールが来た事に気が付かなかったらしい。

「これはまた怒られるな」

いつものことだ。
一つの事に集中しすぎていて、他の事に気が付かないのは俺の長所でもあり、欠点でもある。
時にはいい方向に働くが、時にはこうやってマイナスの方向に働く事もある。
今すぐにごめんなさいのメールを返した方がいいのかもしれないが、やはり怒っているだろうから家に帰ってから電話した方がいいだろう。
前回はデートのお昼を奢ることで許して貰ったから、今回は何かプレゼントでもあげないと許して貰えないかもしれない。
そんなことで苦笑しながら、鞄に素早く荷物を纏めて生徒会室の

ドアを閉める。
カツカツと靴が静かな廊下に反響して、この学校に残っているのが自分だけなのだと改めて感心する。
それもそのはずで、今は下校時刻を十数分過ぎているのだから。
後少ししたら、見回りの先生が生徒が校内に残っていないかをチェックしに来るからそれまでには最低でも帰れる体勢を作っておかなければならない。

四階から三階、そして二階に降りようとしてその足を階段におろした所で、ふと教室に忘れ物をした事に気が付く。
いや、忘れ物というよりもあるかないかを確かめに行くだけなのだが。
記憶が正しければ、万が一の時の為に個人ロッカーに折り畳みの置き傘をしておいたはずだ。
今日は荷物が多かったからいつもの鞄ではなかった事が不幸であった。
いつもの鞄だったらそれに折りたたみ傘を一本入れているから、急な雨でも対処する事が出来たというのに。

「ん？　誰かまだ残ってるのか？」

教室に向かうために角を曲がった所で、灯りがまだついているのを確認できる。
どうやらまだ教室に残っている校則違反者が俺以外にもいたようだ。
こんな時間にまで残っているというのは、おしゃべりが過ぎてしまったのか、それともよほど今日中に何かを先生に提出しなければいけない用事でもあるのか。
どちらにしても、一声かけておいた方がいいだろう。
俺のような人間がそう何人もいるとは思えないが、もしかしたら

集中しすぎていて時間の経過を忘れているかもしれない。

「もう下校時刻過ぎてるけど……」

「……あ」

「……あ」

ポツン、という言葉が宙に浮かんで見えたかのように、女子学生は椅子に座っていた。

何をしている訳でもなく、ただボーっとしていたのか、俺に声をかけられて初めて気が付いたかのような声を上げる。

長い髪の毛が座っていても腰のあたりにまで垂れ下がっていて、それは手入れがしっかりと行き届いているようで毛先まで滑らかだ。

こちらに向けられた顔はまるで芸術品のように精巧に作られたがごとく整っていて、ブレザーの制服の上からもスタイルの良さがはっきりと見てとれる。

その美貌に視線が釘付けになり、ハッと気が付いてから今になって漸く、自分が言わなければいけないことを思い出した。

「すずか、さっきメールに気が付いた。ごめん」

「ううん。気にしてないから大丈夫。お仕事終わったの？」

「ああ。先に帰ってたんじゃないのか？」

「待ってるって書いたら気にするだろうなぁって思ったから。もしかしたらメールに気が付いたけど返す暇も無かったのかもしれなかったし」

そっか、と小さくつぶやく。
やはり俺なんかには出来すぎた彼女だ。
メールに気が付かなかったのは俺の責なのに、それにも構わずこちらの心配をして俺が気にやまないようにと気を使ってくれている。
もしも俺が今日、傘を持ってきていたらどうするつもりだったのだろうか。
教室には寄らなかっただろうから、すずかと会えなかったかもしれないというのに。
でも、すずかは多分俺が一旦教室に戻るって確信していたんだろうなぁと何の根拠もなくそう思う。
何でか、それが間違っているような気は全くしない。

「帰るか」

「うん」

カタン、と小さな音を立ててすずかは立ち上がり、鞄を手に持ってこちらに来る。
並んで廊下を歩くと、若干俺の方が小さく見えるのが気にかかる。
彼女の身長が女子にしては珍しく高く、１７０センチ。
俺の方が１６８センチだから、二センチの差で負けていることになる。
これですずかの方が一つ学年が上だとかならばまだ話しになるのだが、しかし不幸中の幸いに同学年だ。
しかも誕生日的には俺の方が早い。

そんな事に少し苛立ちを覚えながらすずかの方を見てみれば、笑顔でどうしたのかと聞かれてそんな感情は吹き飛んでしまう。
多分、こうやって俺は一生彼女に頭が上がらないんだろうなぁと今後の事を予想してみる。

一生とか無意識の内に考えてしまい、不覚にも顔が熱くなってしまったが、どうにか学校を出る直前で外気に頬がさらされて熱が奪われる。
しかし、隣を見てみれば何とも言えない表情をしているすずか。
「……すずか、まさか傘持ってない？」
「うん……待ってたら降ってきちゃったから」
それは困った。
先ほどの生徒会室で見ていたような夕立かと思えるほどの激しい雨では無くなっているが、しかし以前として降っている事だけは確かだ。
まあ、これくらいの雨量ならば家に帰るまでに風邪をひくことはないだろう。
「じゃあこれ使えよ。俺は大丈夫だから」
「むぅ……そこは相合傘でしょ？」
ツカ、と革靴が乾いた音を響かせる。
一歩、たった一歩だったがすずかが俺との距離を縮めて、その距離はメートルほどあったものが今や数十センチになってしまっている。
しかも、二センチ上から見下ろされる体勢。
いつものようにそれが気になって、ぶっきらぼうな言い方になる。
「恥ずかしいから無理」
「私とはイヤ？」

「うっ……」

態と悲しそうな表情を作って俺をその気にさせようとしていることは今までの経験から分かっている。

すずかの方が身長的には大きいはずなのに、この表情をされるとどうも俺よりも小さく見える。

そんなものはただの幻想に過ぎないのだろうが、しかしそう見えるだけの威力を今の彼女の表情がもっているのは確かな事だ。

「す、すずか。その顔は反則だから……」

「別に態とやってるんじゃないのに……そっか、やっぱり私何かとはイヤだよね？　ごめんね、待ってたりして。私が先に帰ってれば良かったんだよね」

痛々しい表情。

目からはダムが決壊するように涙がこぼれ落ちそうになっていて、その表情はシュンと下を向いてしまったことで見えなくなる。

さらけ出された後頭部はやけに悲しそうで、ともすればスンスンという擬態語が聞こえてきてもおかしくはなさそうだった。

「分かった。俺が悪かったから。だから――」

「良いの？」

「あ、ああ……」

やはりわざと作っていた表情だった。

態とだという事が分かっていても、どうしてもすずかにそういう

表情をして貰いたくないのは惚れた弱み、という奴なのだろうか。
喜んでいる彼女を見て、そんな事はどうでも良いかと思えるようになる。
だが、問題はこの後。
下校時刻を過ぎているから知り合いは少ないだろうとはいえ、一緒の傘で変えるというのはやはり恥ずかしい。
そもそも、学校に来る時でさえ俺が恥ずかしいから手を繋いだりという事はないのだ。
生徒会長が率先して不純異性交遊を為す訳にはいかないという自分でもわけのわからないインチキ理屈をごねて。

折り畳みの傘をさして、すずかと二人その下に収まって学校を出る。
俺が左側で、すずかが右側。
当然傘は俺が右手で持つ形になり、それとばれないように右側に傾ける。
すずかの方が若干身長が高いとは言っても、二センチは誤差の範囲だからそれほどまでに傘を慎重に扱う必要もない。
左手に持っている鞄がかなり濡れてしまっているが、今日は濡れても困るものが鞄の中にはそれほど多く入っていないから大丈夫だろう。
左半身は首から肩にかけてその下が全て雨にさらされてしまっているが、すずかが濡れるよりはずっといい。
女の子の方が寒さには敏感で、風邪をひきやすいのだから。

「すずか、雨当たってないか？」

「うん、大丈夫。……優しいんだから」

「何か言ったか？」

「ううん。何でもない」

すずかさーん。

聞こえてますよー。

というかばれてるのね、俺が傘を右に傾けてる事。

それで優しいとか言われても……こちらが恥ずかしいだけなんですが。

しかもすずかはそれに気が付いていることを俺に分からせないようにしようとしてるし。

まあ、結局どちらも相手を気遣っているから考えてることは相手に筒抜けなんだなぁとさらに顔が赤くなる原因を思考によって生みだしてしまう。

「♪～」

「……すずか？　出来ればそんなにくっつかないで頂けると俺の精神上助かるのだが」

やけにご機嫌に俺の方にやたらと体を預けてくるすずか。

肩には鼻歌を歌っているすずかの頭が乗っかっていて、腕組をして腕が絡み合っている。

若干、二の腕に女性の神秘が当たっているのが心臓に悪い。

「だってくっつかないと雨にぬれちゃうもん」

多分ここで、俺が理屈を以てすずかの事を引き離そうとしたら、またもや泣きそうな目でイヤだった？　とか聞かれるんだろうなぁ

と予想。
ちらりとすずかがどんな表情をしているのか盗み見てみたら、やけに上機嫌で歌を歌っていて、しかもほんの少し頬が上気している。
すずかも、少しは恥ずかしさを覚えているのだろうか。
聡い彼女の事だから、自分の胸が俺の二の腕に当たっていることなど既に分かっているのだろう。
いや、彼女自らそうしているのだから分からない方が不思議だが。

「ま、良いや。……♪～」

これ以上じたばたしても何も変わらないと諦めてすずかの為すがままになる。
そして絶対音感ならぬ大体音感ですずかの歌にハモリを合わせる。
いつもよりも歩調が遅いのは、雨のせいに違いなかった。

すずかｓｓ　とある雨の日（後書き）

本当はこの後に月村家でノエルが出てきて、「風邪をひかれてしまいます」とか何とか言われて風呂に突っ込まれる妄想も続いていたはずだったんだが、作者の力量不足及び気力不足でそこまでいけなかった。
次回はアリサの短編連作……かな？
とにかくアリサがヒロイン。
構想は練ってあるから後はそれを文章にするだけ。

アリサＳＳ　嫌いじゃない（前書き）

本当は最初これを連載しようと思っていた奴を途中で切ってきたですので、中途半端であることは否めません。
設定としては、主人公ではないオリ主がいた事、オリ主は管理局に行った事、それだけを覚えていていただければ内容は把握できると思います。

アリサｓｓ　嫌いじゃない

シャンシャンという音。
どこぞの赤い服を着て空飛ぶトナカイを連れまわしている刑法１３０条違反の御爺さんが思い浮かぶかのようなそんな音が不意に聞こえたような気がしてならない。
キリストの生誕を祝う日はとっくに過ぎ去って、今は丁度受験生が勉強に必死になっている頃だろう。
２月も下旬、そろそろ３月に差し掛かろうというこの時期にあって、海鳴の街には真っ白な雪が降り積もっている。
少し外を歩けば雪を踏む音が聞こえて、小学生が通学路にしている道には少し泥をかぶって汚れているようなものも見受けられる。
それでも先ほどからやむことのない雪はその汚れすらも白く変えようとするかのように景色という景色を白く染め上げて行く。
ハァ、と深く息を漏らせばこれまた白が景色に追加される。
それほどに寒いというのに、俺の姿は海鳴でも有名な橋にあった。
欄干に手袋をはめた手をかけて、どこかたそがれているようにも見える。
何を見ているのか、視線の先は川にそそがれている。
たそがれている、というよりか、もっと客観的に見たら自殺願望者のようにも見える。

「はぁ……」

大きくつかれた溜息はもしかしたら誰かの耳にも届いたのかもしれない。
そう思えるほどに白い息はふつうの呼吸の時よりも多めになっている。

「ここから飛び降りたら……死ねるか？」

通りすがる人がいたら、もしかしたら引き止めてくれたかもしれない。

しかし残念な事にこんな寒い、そして日付も変わるか否か、というくらいの遅い時間にこんな場所に来るような物好きはいない。

故に、独り言のように呟かれたそれを聞きとめる人もいなかった。

ここから飛び降りたら深い川の事だ、氷点下の気温の今であれば一時間もしない内に死ねるかもしれない。

――凍死、か。悪く無い。

そんな事を思うほどに、思考はマヒしている。

後一時間、誰かに声をかけられなかったら死のう。

そう思った次の瞬間――

「……は？」

あまりにも間抜けな声が口から洩れていた。

目は大きく開かれて、視界から取り込まれた情報を脳みそで分析、状況把握に努めようとする。

ボチャン、という音が鳴った時に漸く我に返ったように状況を把握する。

そう、ポチャンではなくボチャンだった。

「え？　今誰か飛び降りたよな……？」

ポチャンだったらどれだけ良かったことか。

あろうことか、後一時間たったら自殺しようと思っていた所で俺ではない、別の人間が飛び降りたのだ。

いや、飛び降りたのではなく落ちてしまったのかもしれない。
そんな事を考えながら、しかし身体は条件反射のように同じく川に飛び込もうとしていた。
とりあえず自分が自殺しようとしていて何だが、目の前で死なれては後味の悪いものがある。
そして自分ももしかしたら客観的に見たら自殺しようとしているように見えるのかもしれないと思いながら、俺は川に飛び込む。
ポチャン、という静かな音を立てて。

「ッ――――――――――――」

声にならない声が上がる。
予想していたよりも、冷たい――いや、痛い。
川の水が凍っていないから恐らく水温は零度を切っていないのだろうが、それにしても痛いと思えるほどに冷たい水温は確実に命の時間を削ろうとしている。
だが、助けに飛び込んで助けられなくて死んだなどという事になっては末代までの恥。

「……いや、死んだらそもそも子供が出来ないから末代は無いか」

とりあえず自分ではない自殺願望者を助けたら、一発殴ってやろう。
そんな事を思いながら必死に泳いでいた。

◆◆◆

入学式。
それは待ち望んだ学校生活の最初の一日を知らせるべくして行われる学校行事。
一か月もたてば夢見ていた学校生活など塵芥となるだろうが、既にやる気のない表情を浮かべているものが若干一名。
聖祥大付属というこの高校は、小学校から大学までエレベーター式――いや、エスカレーター式？――まあ、どちらでも良いがとにかくそのまま上がれるのである。しかし中には中学や高校、大学から編入してくる生徒もいない訳ではなく、そうした中の一人という訳であった。
故に殆どが中学からあがって来た生徒で構成されているが、その者たちもこれから始まる高校生活に思いをはせている。
だというのに、俺はまるでこの世の終わりのような表情で決して後ろを見ないようにして真面目に話を聞いている振りをしていた。
後ろで目を光らせているのは今年の一年の中でもトップ2と言われるほどに美人であるアリサ・バニングス。何を隠そうついぞ先月に川に飛び込んで自殺しようとしていた張本人だ。

「……」

嫌な汗が流れて仕方ない。
背後から――正確には若干斜め後ろから感じる殺気にも近い視線は、舐めまわすかのようにして俺の背中を駆け巡る。もしかしたら、アリサを助けようとしたあの時よりも鳥肌が立っているかもしれない。
思い返せばアリサとの関係は小学生のころから――らしい。
らしい、というのは俺が記憶喪失などというけったいなことになってしまったからだ。
昔のころにあった記憶というのはその全てが抜け落ちてしまって

いる。どういう訳か言語能力や計算能力など、日々暮らしていく分には不可欠なものは抜け落ちずに、医者の話しによればエピソード記憶とかいう部分が抜け落ちてしまっているらしい。だから生活の分には問題ないが、昔の事が思い出せないのだとか。

とりあえず経歴としては捨て子として施設に預けられて、少し平均よりも収入が上の一般家庭に養子として引き取られ、何なく暮らしていたらしい。

記憶喪失になってからは知らない人と家族という事で、少しぎくしゃくしていたのだが、今ではそれも無くなっている……はず。

とりあえず、アリサと知り合いというのは俺が引き取られた施設が彼女の父がそこの経営をしていたという事があって、小さい頃に会った事があるという程度なのだが。しかし彼女の方は覚えてくれていたらしい。いや、それが本当かどうかも記憶を失ってしまった訳で確かめるすべを持たないのだが。

まあ、残っている資料から考えるならばアリサとの関係について思考をした所で仕方のないことだ。何よりもそんな資料が一つも残っていないのだから。手紙の一つでもやり取りしていれば分かっただろうが、しかしそんなものは持っていない。ケータイを持っていたなどという事は無いから、メールのやり取りをしていたという事もないだろう。つまり、互いに知り合いだったかなどという事はアリサの記憶一つで決定されてしまうのである。

「では新入生は各クラスに戻って――」

漸く校長の長い話が終わって、クラスに戻ることになる。

小学校から大学まで全て系列で繋がっているといっても、学校ごとに校長が違っているから、入学式というものが存在する。これが巷の私立進学校のように中高一貫校だったら面倒な入学式も無かったのだろうが、まあある事無い事に文句を言っても仕方のないことだ。

とりあえず、今やるべきことは自分に与えられた脳みそを使っていかにアリサから逃げ切るかという事を考える事。
幸いにも神はこの自分に類稀なる力を与えてくれたようで、普通人よりも頭の回転速度は早い方だと自負している。そうでなければ養子として引き取ってくれた家に迷惑をかけないように高校など通わないのだが、一応特待生だから授業料は免除されているのである。まああの家族がそんな事を気にするような人たちではないという事は一番良く分かっているつもりだが、やはり記憶を失ってからどこか他人のようだという感情が未だ拭えないのかもしれない。

「待ちなさい」
「……うぃ」

ウィ、ってフランス語ではい、っていう意味だったか。
いや、そんな事よりも問題は考える暇もなくアリサに呼びとめられたという事。そしてアリサという存在は嫌がおうにも目立ってしまい、目立たない俺という存在が彼女に呼びとめられたという事は衆目の注意を引く事になった。月村すずかと並んでアリサは今年の一年生の中ではトップ2なのだ。何がトップ2って可愛い子ランキングなるものだ。
確かに可愛い。それは認めざるを得ない。
ついぞ先月に助けたときだってそんなことは分かっていた。
だが、目立つつもりなど全くなかったというのに。そして彼女と此処で出会う事になるなどと、誰が分かっていただろうか。まさしく神のみぞ知る。

「あんた、私にいうべき事があるわよね」
「さ、さぁ……」

しらばっくれてみた所で何もごまかせるものではないし、むしろ

衆目の注意を一層引いてしまったようだ。
　アリサに詰め寄られて、その距離は唇どうしが触れ合いそうなほどに近いものになっている。無意識のうちにそれを意識してしまったのか、多分顔は真っ赤になっているだろう。気のせいではなく、アリサから良い香りもする。

「あら、別に私はここで大声あげても良いのよ？」

　前々から思っていたことだが、アリサは絶対にＳだ。それもドが付くほどに。楽しそうに笑っている唇がそれを如実に示している。
　……柔らかそうだ。
　いやいや、そんな事を考えるんじゃなくて。

「……すいませんでした」
「ん。よろしい。……とでも言うと思った訳？」

　誠心誠意謝ったつもりだったのだが。
　いや、そう主観的に考えている時点で誠心誠意ではないのか。
ツカツカ、とさらに距離を詰めよられて、それから逃げるようにすればあっという間に壁に追いやられて背中が廊下の壁に接する。それだけで注目を集めているのだが、そこへさらにアリサが詰め寄ってきて息がかかりそうなほどに顔を近づけてくるものだからこちらはさらに焦る。少し顔を前に出せばキスが出来そうなほどで、しかしそんな事をすれば彼女の思い通りだ。
　いや、全くそんなつもりはないが。

「近い、です」
「そうね。で、あんたは何で連絡一つ寄越さないのかしら？」
「まあ、色々とあったから。というか後にしないか？　かなり注目されてて恥ずかしいんだが……です」

いつものような口調になってしまって、しかし詰問されているかのような状況に最後の最後で丁寧語になる。いや、アリサに詰問されているからではなく、周りに話を聞かれているから丁寧語にしているのだろう。などと状況を分析してみるが、それで状況を良くする手が浮かぶ訳ではない。無駄に頭が良くてもこういう時に何も考えられないのでは全く役に立たない。いや、アリサに詰め寄られて思考が麻痺しているのだろうが。

「……仕方ないわね。逃げるんじゃないわよ？」

「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ」

とりあえずその場しのぎはどうにか出来たようで、しかし今日は早く帰れそうにない。入学式だけで後はすぐに家に帰れると思っていたのに、どうも無理なようだ。放課後になるまでにいい案が思い浮かべばいいのだが……。

◆◆◆

アリサを助けたあの日、彼女と知り合う事になってしまい、それから慣れ合うようにして彼氏彼女として付き合うような事になってしまった。まあ、付き合うといっても互いの傷を舐めるようにして作られた仮の関係なのだが。だから、期限付きでこの間の三月までという仮の関係を楽しんでいたのだが、アレで終わりとばかり思っていた。

別にお互い好きな訳でもなく、相手の事が全く分からないという

のに付き合うなどという事になってしまって、結局はなあなあに終わったとばかり思っていたが、どうやら神はいたずらな運命を作ったようだ。

あれ以来アリサとは一度も連絡を取らず、もう会う事もないと思っていたのに、まさか同じ学校でしかも同じクラスになってしまうとは。

そりゃまあ、仮とはいえ一度は付き合った関係なのだから連絡を寄越さなかったら怒るよなぁと思いながら足早に廊下を進む。

ただいま絶賛、彼女から逃げている所なのだ。

勿論自分としても彼女とこれまでの関係を続けることにやぶさかではない。可愛いし、一か月の幻想は楽しかったし。だが、彼女の性格は一か月の付き合いとは言えかなり分かっているつもりだ。つまり、あの関係が彼女にとっても自分にとっても良く無いものだと分かっていたから連絡を取らないことで終わらせようとして、その事に怒っているのだろう。

携帯電話を持っていないなどと嘘をついたから彼女の携帯の電話番号を渡されて、それに連絡をするように言われたが、あの紙は今も机の引き出しの中にしまってあるままだ。一度もそれを取りだして連絡を取ったことは無い。

後ろから追いかけてくる般若のような形相をしたアリサに捕まってしまったら、間違いなく一時間は説教という名の地獄が待ちかまえている。何時までも逃げおおせられるわけがないのだが、しかし先延ばしにすることは出来るはずだ……と信じたい。いや、信じているからこそ今こうやって逃げているのだが。

「待ちなさい！」

当初予定していた他人の振りをして逃げる、という事は出来なくなってしまっているようだ。廊下を走ることなく競歩の選手のように早歩きしながら悪魔から遠ざかろうとして、しかしそれは後ろを

追いかけてきている悪魔――アリサのせいで追いかけられているのだと分かってしまう。
しかし、あと一つ角を曲がればこちらの勝ちである。
そこにあるのは男子トイレ。流石のアリサと言えどもそこまで追いかけてくるなどという事は無い。彼女にも面子があるのだから。
最後の角を曲がって追いつかれそうになった所でとうとう走り出し、俺は男子トイレに駆け込む。幸いにも走り出した所は教師の目にはつかない所だったから怒られるという事は無い。

「危なかった……」

聖地――男子トイレに何とか逃げ込む事が出来て、そして次の思考はこれからどうやって帰るか、という事に繋がる訳だが、伊達に頭だけは良いと自負している訳ではない。ちゃんと考えがあって、此処に逃げ込んだのだ。
教室から一番遠い此処は、大きな窓が付いていて、そこから外に出られるようになっている。つまり、外で待ち構えているであろうアリサは何時までもそこで待っていて、窓から外に逃げた自分を追いかけることは叶わないという訳だ。
問題は明日の朝に、待ちかまえられていたらどうするかという事。

「まあ、それは今日の夜にじっくり考えるとして。今はとにかく逃げる事が先決――」
「――なるほど。窓が付いてたわけね」

ガシッ、と襟首を掴まれて、強制的にギギギという軋んだ音を立てて首が振り向かされる。
そこに居たのは息を呑むほどに美しい少女。……この場がトイレではなかったら本当にそう思える。
満足げな表情を浮かべているアリサはまるで獲物を捉えた蛇のよ

うに舌舐めずりでもしそうな勢いで見つめてくる。いや、見つめてくるなどという生易しいものではない。むしろ捕食しようとしているかのようだ。

「……な、何で男子トイレに居るのでせう？」

「何で、ってあんたを捕まえる為に決まってるでしょ。今度は逃がさないわよ」

ニヤリ、と良い笑顔でアリサは詰め寄ってくる。

トイレなどという場所なのにさっきの良い匂いが鼻を掠めて仕方ない。先ほどと同じように、今度は壁ではなく壁にはめられている窓に追い詰められて逃げ場を失う。時間という逃げ道も残されていないし、しっかりと手首を掴まれて押さえつけられている。どうやら此処までのようだ。諦める、という道しか残されていないらしい。

「ふふ。ここで私が叫んだらどうなるかしらね？」

「勘弁してくれ……」

躊躇もなく男子トイレに入ってくるアリサは間違いなく変態だ、などとは口が裂けても言えない。言ったら最後、この世の言葉では表せないほどに酷い処刑が待ちかまえているのだろう。というか本当に良く躊躇いもなく入ってこれたな、おい。他の人がいたらどうするつもりだったんだ。

「冗談よ」

何処までが冗談なのか。

多分、機嫌を損ねるような事をしたらこのネタで脅されるに違いない。それが分からないほどに浅い付き合いだった訳ではない。いやまあ、そんなに深い付き合いだった訳でもないか。お互いに知っ

ていることなんて名前くらいだ。

「さて、なにはともあれ本題ね。約束を反故にした重罪人にはどんな罰を与えるべきかしら？」

うむ。これは完璧に許す気ゼロだなぁ。

機嫌を取って、とかいう問題ではない。

非は全てこちらにあるのだし、その非から逃げるようにしていたのだから自業自得か。そのぐらいの事が分からなくて逃げていた訳ではないが、やはりこうして現実に立ち会ってみると少しは後悔もする。

「き、今日のお昼、俺の奢りというのはどうでしょう？」

「は？　そんなので済むと思ってるの？　……というかそれよりも重大な話があるでしょうに」

地獄の番人も裸足で逃げ帰るかのような冷たい目で見られた後、アリサは呆れたように溜息をつく。そんな仕草の一つ一つが色気に満ちているのだから美人というのは卑怯なものだ。……ここがトイレじゃなかったら素直にそれだけを思えるのだが。

「重大な話？」

「……」

あ、何か不味い質問をしたらしい。

この感じは前にもあった。デートの時に遅れて行ったらこんな感じになってたから間違いない。確実に怒ってる。いや、怒っているという事だけでは表現し尽くしきれていないだろう。

「ハァ……私たちの関係に決まってるでしょ」

「あー、なるほど」

相槌を打ってみたが、しかしてっきりアレで終わりとばかり思っていたからそんな話をぶり返されるとは思っていなかった。俺の中では、アレは無かった事にしてお互いに初対面という事にするものだとばかり思っていたのだ。まあ、廊下を爆歩したし、色々と注目を浴びることをしたから初対面とは言えないかもしれないが。

「アレは若さゆえの過ちだから無かった事に……はならないか」

途中で尻すぼみしてしまう。

それはアリサが殺気とも思えるほどに怒気を放っていたから。

分かってはいた。あの一か月の事がなかった事にならないとは。

そんな事にすれば、それはアリサを侮辱している事に他ならない。

「3回死なすわよ」

「冗談だ」

でも本当にどうしようか。幾らなんでも同じ学校の同じクラスで今までの関係をそのまま続けるという事は出来ない。

仮にもアリサは世界で最も巨大な財閥の一人娘。それに対してこちらはただの一般人であるどころか、記憶喪失付きといういわくがある。しかも、正式に付き合っている訳でもなく、その関係はお互いに傷をなめ合うほどに脆い。アリサは失恋の悲しみをいやそうとしていただけだし、俺はそれに付き合っていただけだ。幾らなんでも、このまま付き合うという訳にはいかないだろう。

「アリサは、どうしたいんだ？」

「……卑怯者」

「戦略的、と言って貰いたいな」

コツン、とアリサの額が俺のそれにぶつけられる。
たまにこういう乙女チックな仕草をされるから無駄に心臓のテンポが跳ね上がる。こうやって目を合わせている今、激しすぎるくらいのこの鼓動が聞こえていないか、それを意識するほどにさらにテンポはアクセルを踏む。ブレーキを踏もうとしても足が届かずに、速度はさらに増していく。
選択をアリサに委ねることは確かに卑怯だ。こういうときは男らしく決める、というのが相場だろう。しかしそんな事は俺には出来ない。アリサがどうしたいかなど、肌で触れ合った程度では到底理解できないことだ。

「わたし、は……」

瞳を閉じて、ぼそりと呟くようにアリサは紡ぐ。
綺麗なまつ毛が目について、ぷっくりとした唇を無意識のうちに目で追ってしまう。まるで神が作った芸術品のようにも感じられる顔の造り。
どうして彼女が振られたのかが未だに良く理解できない。こんなに綺麗で、こんなに可愛くて、男がこの魅力に捕まえられないはずがない。アリサが思う通りに事が運ぶだろう。だというのに、彼女がどうして失恋などしたのか。アリサの事を振った男は、何を見たのか。何を思ったのか。アリサなどが目に入らないほどに美しいものでも見たのだろうか。
ふと、そんな事を思ってしまう。

「私は、あんたの事が嫌いじゃない」
「……結局アリサも卑怯じゃないか」

好き、とは決して言わない。

凍えるようなあの日にアリサを救ってから今日にいたるまで、その言葉を聞いた日は無い。
嫌いじゃない。
この言葉は何度も言われたような気がする。
俺達はお互いに卑怯だ。互いに好きでもないのに嫌いじゃない、という言葉で騙すようにお互いを利用する。傷を見せないでそこにあるはずの傷をなめ合って、お互いがさびしく無いように寄り添うだけ。本気で相手の事を救おうとか、支えようとか、そういう事は思わない。ただ、寂しさを紛らわせるだけだ。

「あんたは？」
「俺も、アリサの事は嫌いじゃない」

卑怯だとはお互いに分かっている。
決して好きだとは言わない。
怖いのだ。この関係がその一言で崩れ去ってしまうのが。まるで砂で作った城が壊れるようにこの関係が崩壊してしまうのは目に見えている。だから、お互いに今まで好き、という言葉は使ってこなかった。
ひと冬限りの恋愛。
そう、思っていたのに、神はいたずらにも再びこうやって俺とアリサを出会わせてしまった。アリサがそう望んだのか、それとも俺がそう望んだのか。それとも、始めからそうなる運命だったのか。
神のみぞ知る、そういう事か。

「嫌いじゃないなら、今のままの関係でも良いでしょ？」

閉ざされていた目が開いて、再び視線が交差する。
吸い込まれそうになるほどに、深い緑の目が俺の事を見据えていた。

その瞳に映っているのは確かに自分の姿だ。なのに、不安が宿っているように見えるのは気のせいではないのだろう。それは砂の城を暗示しているようで、一歩踏み間違えたら潰してしまうのかもしれない。

「アリサは、それで良いのか？　お前の事を気にかける奴なんて吐いて捨てるほどに居るだろ？」
「あんたは、それで良いの？　あんたの事を好きだっていう女の子もいるかもしれないのよ？」

互いに確認し合う。
こうでもしなければ、脆い関係はすぐに消えてなくなってしまいそうだから。
まるで上書きするようにじっとお互いを見つめて確認し合う。
それは、契約を結ぶかのよう。

「「良いよ。嫌いじゃないから」」

アリサＳＳ　嫌いじゃない（後書き）

凄い、中途半端。
甘くも何ともないし……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0671q/

妄想してみた

2011年4月9日14時24分発行